

# 海外研修視察報告書

海外教育推進高校教師レポート

1973

海外移住事業団

Japan Emigration Service



国際協力事業団	
受入 月日 '84. 8. 10	700
登録No. 02834	23.4
	EM

## ま え が き

1970年代は、国際化時代として「豊かな国づくりをすすめるとともに日本人の持っている優れた能力を海外で大いに伸ばすべき海外発展の時代」とも思われます。

このような背景のもとに、特に意気軒昂な青少年に対して広く世界の歴史や現状に目を開かせ、海外発展思想の高揚を図るための教育を行うことは極めて重要なことであると思えます。

当事業団におきましては、この一助として例年全国の海外教育推進高校の中から、数名の教師を選抜して南北米の諸国に約1カ月間研修のため派遣しておりますが、今年度は7名の教師を派遣しました。この研修のおもな課題は、それぞれの国における産業、経済、文化、教育事情および日本人の活躍状況などありますが、旅行日程にもゆとりがないので名実ともにとび歩きの状態だったろうとその苦勞のほどが察せられます。

先般、全員無事帰国されこのほど海外研修のレポートが寄せられましたのでこれを整理し報告書にまとめました。

短期間の研修旅行にもかかわらず貴重な体験談やご意見あるいは見聞の故々が収録されており、これからの海外研修旅行や海外教育の普及推進活動に資する点が多いと思えます。

この報告書を発行するにあたり、今日まで海外研修の体験を積まれた先生方および全国の海外教育推進高校における諸先生方の一層のご理解とご尽力をお願いしてやみません。

1973年10月19日

海外移住事業団

振興部長

JICA LIBRARY



1053206[7]

## ま え が き

1970年代は、国際化時代として「豊かな国づくりをすすめるとともに日本人の持っている優れた能力を海外で大いに伸ばすべき海外発展の時代」とも思われます。

このような背景のもとに、特に意気軒昂な青少年に対して広く世界の歴史や現状に目を開かせ、海外発展思想の高揚を図るための教育を行うことは極めて重要なことであると思います。

当事業団におきましては、この一助として例年全国の海外教育推進高校の中から、数名の教師を選抜して南北米の諸国に約1カ月間研修のため派遣しておりますが、今年度は7名の教師を派遣しました。この研修のおもな課題は、それぞれの国における産業、経済、文化、教育事情および日本人の活躍状況などでありますが、旅行日程にもゆとりがないので名実ともにとび歩きの状態だったろうとその苦勞のほどが察せられます。

先般、全員無事帰国されこのほど海外研修のレポートが寄せられましたのでこれを整理し報告書にまとめました。

短期間の研修旅行にもかかわらず貴重な体験談やご意見あるいは見聞の故々が収録されており、これからの海外研修旅行や海外教育の普及推進活動に資する点が多いと思われま

す。

この報告書を発行するにあたり、今日まで海外研修の体験を積まれた先生方および全国の海外教育推進高校における諸先生方の一層のご理解とご尽力をお願いしてやみません。

1973年10月19日

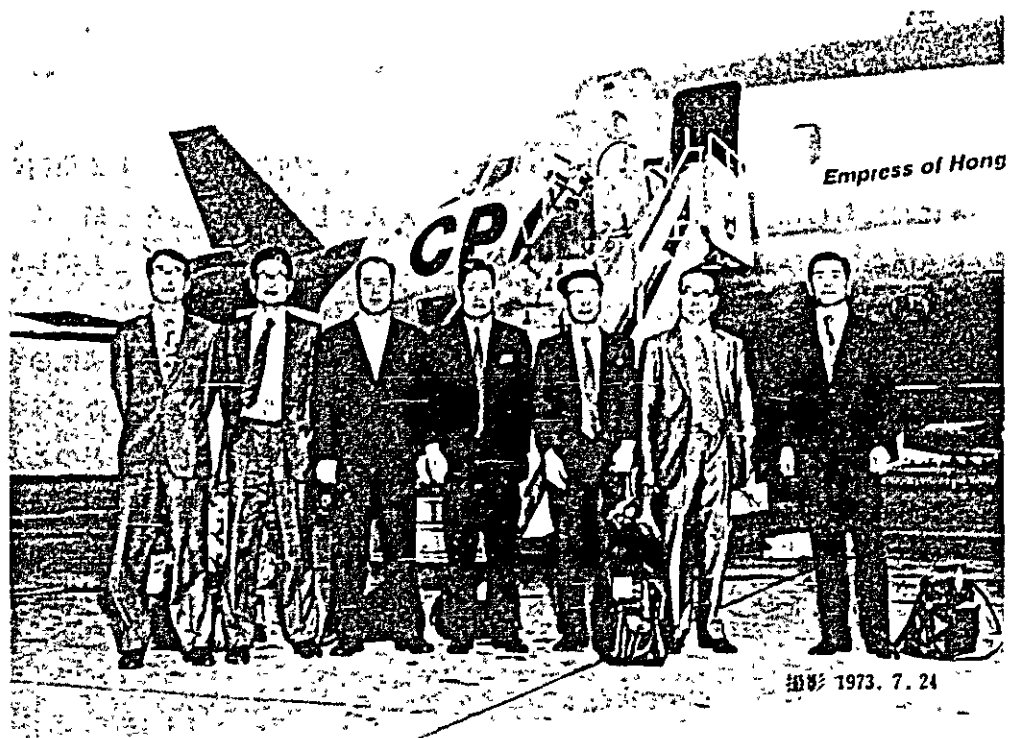
海外移住事業団  
振 興 部 長

## も く じ

### ま え が き

派遣教師団名簿	1
視察にあたって	2
視察日程	3
視察コース略図	4
視察報告	5
I カナダ国	5
II ブラジル国	11
1 ペレーン、トメアス	11
2 ブラジリア	16
3 リオ・デ・ジャネイロ	17
4 サンパウロ	18
5 ブラジルの風土	30
III パラグアイ国	37
IV アルゼンチン国	37
視察ア・ラ・カルト	41
視察を終って	46
参 考 資 料	
1 海外研修派遣教師一覧表	48
2 海外派遣教師の活動状況について	50
3 南・北・中アメリカ在留日系人数	56
4 日本人が移住しているおもな国	57
5 海外移住事業団国内機関一覧表	59

さ 出 発 (羽田空港)



左から 高田, 稲田, 立田, 外園(団長),  
坂本(副団長), 田辺, 松本の各先生

昭和 48 年度海外研修派遣教師団名簿

県名	氏名	学校名・職名	学校所在地	担 当
大分	外園 淳	県立宇佐農業高等学校長	大分県宇佐市四日市	団 長
長野	坂本 勝三	県立須坂園芸高等学校長	長野県須坂市須坂	副団長, カナダ
岡山	高田 浩二	県立天城高等学校教諭	岡山県倉敷市藤戸町天城	会計, ブラジル (ベレーン, トメアス)
埼玉	田辺 鶴松	県立熊谷農業高等学校教諭	熊谷市大字熊谷1760	ブラジル (ブラジリア, リオ)
和歌山	稲田 武彦	県立橋本高等学校教諭	和歌山県橋本市古佐田	渉外, ブラジル(サンパウロ)
高知	立田 好次	県立高知農業高等学校教諭	高知県南国市東崎	パラグアイ
三重	松本 嘉一	県立名張高等学校教諭	三重県名張市東町	アルゼンチン

## 視 察 に あ た っ て

昭和 48 年度全国海外教育推進高校代表として、南・北米における教育、文化、社会事情および日本人移住地事情等について研修視察のはなしを受けたのは 5 月上旬頃であった。

行きたいと云う心と何か不安感の入り交った心境で何日間かよく考え周囲の人々に相談もした。然し結局は人に聞いたり訊んだりした南米大陸を直接この目で見る機会は再びあるまい。何はともあれ決心して研修視察に加わることにした。

そこで、6 月 7、8 日の両日、海外移住事業団の招集による会合で旅行スケジュールの詳細な説明を受け海外旅行の手続、注意並びに勉強会で移住事業団の各責任者より具体的に全国各地の概要、移住地事情、営農事情、政情、教育事情等予備知識を得た。あいさつの中で特に「どん欲なまで視察して欲しい」とのことばが終始耳をはなれなかった。

視察団の編成、任務の分担等その打合せは詳細を極めたが、この頃より何かその任務の重さをひしひしと感じて不安感がつきまとうのをどうすることも出来なかった。

なお、この視察について次の 3 つのことを確認、目標を定めた。

- 団員の努力により最も有効な視察であるように
- 団員の協力により楽しい視察であるように
- 団員の注意により全員が健康であるように

しかし何しろ全国各県から集った 7 人であり、年齢も最高 58 才、最低 32 才とひらき、その専門においても農業の経営、畜産、養蚕があり、更に倫理、社会、地理等普通教科まで各分野に分れておることはやはり心配であった。

しかし、この視察団がおのおのその個性のよさを発揮して更にその共通性の上にたって大同団結 32 日間の長期視察を成功させるべく全員がその知性と良識により一致団結して最後まで立派にその職責を果し得たことを自負している。これもひとえに豊富な経験による海外移住事業団の細密な計画と関係各位の指導協力の賜と深く感謝している次第である。

研修視察教師団一同

視 察 日 程 (48.7.24~8.24)

月日	曜	出 発 地	便 名	到 着 地	ホ テ ル 名
7.24	火	東京(羽田空港)	CP402	バンクーバー (カナダ)	ブルー、ホライゾンホテル
25	水	バンクーバー	AC160 KH037	レスブリッジ ボックスホール	コロナホテル
28	土	ボックスホール	KH036 AC160	トロント	フォアシーズンヤラトンホテル
30	月	トロント	AA568	ニューヨーク	(乗 継)
〃		ニューヨーク	DL248	マイアミ	(乗 継)
〃		マイアミ	R0809		(機 中)
31	火			ベレン	ホテルパンジャ
8. 1	水	ベレン	エア・タク シニ テコテコ	トメアス	第2トメアス移住地
2	木	トメアス	同 上	ベレン	ホテルパンジャ
4	土	ベレン	VP283	ブラジリア	アルポラーダホテル
5	日	ブラジリア	VP291	リオデジャネイロ	フロリダホテル
7	火	リオデジャネイロ	SC401	サンパウロ	ロンドニアホテル
14	火	サンパウロ	R0865 自 動 車	イグアス	イグアス移住地
15	水	イグアス	バ ス	アスンシオン	内山田旅館
16	木	アスンシオン	〃	エンカルナシオン	
〃	〃	エンカルナシオン	自 動 車	アルトパラナ	アルトパラナ移住地
17	金	アルトパラナ	〃	エンカルナシオン	小田旅館
18	土	エンカルナシオン	川 船	ボサーダス	
〃	〃	ボサーダス	AU055	ブエノスアイレス	ホテルノガロ
21	火	ブエノスアイレス	AR370	リマ(ペルー)	(着 陸)
				ポコダ (コロンビヤ)	(着 陸)
				メキシコシティ (メキシコ)	(着 陸)
				ロスアンゼルス	
22	水	ロスアンゼルス	AU005	ホノルル	カイマナビーチホテル
23	木	ホノルル	JL061		(日付変更)
24	金			東 京	



視察コース略図



# 視 察 報 告

## I カ ナ ダ

7月23日から四ツ谷の海外移住事業団本部で所要の手続きを済ませ、関係筋への挨拶を終った一行は、24日午後6時すぎ事業団の方々および近親者に見送られて羽田を出発した。

幸い事業団の吉村・古山両氏の御尽力によりバンクーバーまで一等の切符を手に入れることができた。DC8型機CP社のfirst classであるだけに万時待遇がよく、この時ばかりはちょっとした優越感に浸ることができた。7時17分頃西側の空は、水際が赤に上部は藍色に変わってとてもきれいであったが間もなく暗くなりしばらく仮眠することになった。機は給油のためにアンカレッジに向っている。

日本時間で午後11時40分頃急に空は明るくなり、機は雲海の上を飛んでいた。0時20分(現地時間8時20分)アンカレッジ着、40分位給油し出発、約3時間かかり、現地時間で午後1時頃バンクーバーに着陸した。結局10時間も飛行機に乗り、時間を越えてバンクーバーに到着したことになる。

かろうじてRobster街のBlue Horizon Hotelにたどりつき一応落ちついた後、市内見学を兼ねて昨年度の派遣団が会合を開いたというグランビル街の舞子ガーデンに出掛けることになった。

途中で道を確認するため“Will you please show me the way to the Grandville Street?”とか何とかいってたずねたところ、その白人の女は「私もいまそちらへ行くところです。どちらに用事があるのですか」と明瞭な日本語で答えられ、啞然としてしまった。

バンクーバーは街路が碁盤状に整然としており、住宅街とダウンタウンは画然と分れている。住宅街の芝生はきれいに手入れされている。ダウンタウンは土産物屋の多い町で、中には日本製と思われるものを売っている店もある。その夜は舞子ガーデンで早くも日本食の夕食をとり、外国における初めての夜の夢を高層ビルのホテルのベッドで結んだ。

明るく7月25日タクシーを頼んでスタンレーパークを見学、空港には10時30分に到着した。

空港内レストランにて、朝食にContinental Breakfastというのが適当と思い注文したところ紅茶、ジュースの他は甘いお子さん用の菓子パンで全くとがっかりした。

小雨の中を午後1時30分にカルガリーに向けて出発、カルガリーにて乗換え軽飛行機でレスブリッジに向う。

レスブリッジではボックスホールの日系二世の大熊さん、山下さん、金川さん等が嬉しい手で温く迎えてくれた。ボックスホール滞在期間は4泊5日にわたったが、視察はいつもこの二世の人達の運転する豪華なクライスラーに乗せて頂いた。この誌上を借りて厚く感謝の意を申述べたい。

荷物は届いていなかったが、この人達に付近の日本庭園の御案内を頂いたり食事のお世話をしている内に次の便で届いたのでほっとした。

コロナホテルという所で宿泊する。このホテルのボスは日本びいきの気のよいおっさんで、その晩は競馬に賭けて勝ったとかで、ビール、スコッチの大盛振舞いをしてくれた。ホテルの一階がバーとコーヒーショップになっており、その夜のバーは西部劇の居酒屋風景そっくりであった。

このホテルは一晚4ドルと極めて安いが、サービスがよく気易く泊ることができる。一般にカナダでは男女の手洗いの入口には、Gentlemen, Ladies と英語で示す他に、フランス語を併記する訳だが、ここでは英語の他に男・女と日本語で書いてくれと頼まれたが果さなかった。

二世の人達の話によると、この人達ははじめB・C州で苺の栽培をしていたが、戦争が始って1942年土地は取り上げられ強制的にアルバータ州に移された。そこで大根の引き抜きやその始末の労働に従事させられた。しかし、その後誠実に、計画的に働くことによって、今日の地位を築き上げたのである。アルバータ州はカナダの穀倉地帯で、日系人は馬鈴薯・小麦・ビート等の栽培、牧場の経営に当り、その平均経営面積は870エーカー(348町歩)で安定した経営を行っている。

農美移住者は馬鈴薯組合が農美訓練生受入れ委員会を作って計画的に毎年30人程受入れている。賃金は最初の一年11~3月最低で月250ドル、4~10月275ドル、2年目11~3月275ドル、4~10月325ドル、2年以上経過したものは350~400ドルで、訓練期間中の労働は相当きびしい。妻帯すれば2DK程度のトレーラーハウスが無料で与えられ、保険金40ドル程度が差引かれる。

最近訓練生の中でも契約を守らず、人間としての資質を問われるものもいる由で、親の子供に対する教育の仕方に疑問を感じざるを得ない。最近はそのような節操のない若者が30%にも上り、同じ日本人として情ない次第である。

8月26日はアルファルファを原料にした固形飼料ペレット生産工場を見学した。作夜のバーで愛嬌をふりまいた巨漢のBig John が真剣に働いており、卒先して案内役を引

き受けてくれた。この工場はかなり施設も充実しており、日本にも1500トン程輸出しているそうである。

次に田尻さんという方が社長をしておられる馬鈴薯工場 (Pack-age Product LTD) を見学した。ここでは5500 エーカーから生産される馬鈴薯を芽止め後高さ3mに詰め込み貯蔵する。建物は普通体育館の何倍もあるかと思われる貯蔵庫、洗静場、袋詰め作業場等から成っていた。

馬鈴薯の1トン当りの価格は、ある年では18ドル位に下落したこともあるが、昨年は80ドル、今年は170ドル位で、この会社の株主7人の日系人達の体意は荒いようであった。

アルバータ州は穀倉地帯であるばかりでなく石油も産するので、カナダ第一の富裕な州である。とくに農業に対しては助成政策をとり、農業者が雇うアルバイトには月200ドルもの政府保障がある由である。

田尻さんの Instant granule mash potato の工場を見学する。

次いで田尻さんの馬鈴薯畑に案内されたが、広大な畑で1枚150 エーカーあるそうである。1 エーカー15トン生産されればよい方であるがここでは20トンは穫れそうである。

山下さんのところでCC (Canadian Club) や米のビール (Frisner) を御馳走になる。

何分にも広大な原野で、隣の大熊さんの家が5~6マイル離れている。釣りに行くにしても120マイル位車を飛ばしてゆくことがあるそうである。

金川さんのグリーンピースの畑を見る。畑の一面が約2kmでグリーンピースはよく実っており、刈取機が待機していた。

次の日は、はじめ政府のイリゲーションセンターを見たが、政府所産であるだけに、水は豊富で安い。300 エーカー当り320ドルで済むそうである。

政府の牧場を右に見て大熊さんの農場に向う。大熊さんの農場も一区画が240~250町歩で、馬鈴薯も豊作のようであった。ここに立つてみるとカナダが Land of big sky (大きな空の国) という実感が段々と湧く。

牧場にはヘレホート♀×アンカス♂の交配種が340頭程ゆうゆうと草を食べていた。他にシャロールというのもいる。この国では牛に角があれば罰金だそうである。

金川さんの家で昼食。金川さんは以前は情ないようなところに強制開墾されていたが今はカトンツリーというポプラに似た喬木に囲まれた立派な家を持っている。大型トラックが8台位あるそうで小型はどの位あるのだろうか。主人は仕事をしないのが普通で、支

配人が農場を監督している。金川さんは100エーカーの他に牧場があるから2000エーカー位経営しているという。

金川さんの弟さんが豚の飼育をしているので見学した。ヨークシア、ランドレース、タイムレースの三元雑種を2000頭位飼育している。1豚房に10頭あり、この豚房が40位ある。すべて強制換気されており、これを2人で管理していた。1頭が200～400ドルになるという。

土地の取得については、65才以上の方は土地を手離すことがあるので手に入れるチャンスがある。はじめからポーソン（農場主）にはなれないが何事も精神一つ、金のことを考えすぎると駄目で5～6年は辛抱しなければならぬ。

金川さんの馬鈴薯畑ではポーソンや支配人の娘達が掘取機に乗ってアルバイトをしていたのが心に残った。

次いで大熊さんの家に向う。学校のグラウンド程もある農具置場に、大根掘りの機械の他に1作物くついでる3種類位の大きなアタッチメントが並んでいる。間口30m奥行50m位あるだろうと思われる馬鈴薯の貯蔵庫が並んでいる。そのうちの1棟は新しいものであるがその中に12個の車輪をもった15トン積み位の大型トラックが9台並んでいた。1台の掘機に3台のトラックが必要になるそうである。

農場の一隅に農機具の修理工場があったが、これが間口20m奥行40m位でちょっとした町工場に匹敵する規模である。この工場の中に一丁の銚子が置いてあった。これは開戦当時日系人がアルバータ州に強制移住をさせられた時、さとう大根の根と葉を断ち切るのに使われたもので、苦勞が多かったその当時に忘れないために保存してあるものだという。

北川さんの農場を見学、農場は960アールあるそうで、牧場には背中が白いブラウンスイス、頭の白いヘレホードやシャローレという牛が草を食んでいた。

ボックスホールではこの親切な二世の人達や大熊さんのお父さんに大変世話になったが、この人達は我々に次のように話していた。

カナダの日系1・2世は白人から大変信頼されている。農業訓練生の制度は川井さんと中島さんと大熊（父）さんが話し合っただけで作ったものである。目的は大規模農業技術を身につけさせることと、農業の後継ぎを作ることである。現在5回生がいる。1～2回生は真面目でよい成績を挙げているが、最近の人は勝手な行動をするものが多くて困る。4回生は21名のうち11名しか残っていない。

カナダは文化面で優れており、社会福祉の制度も整っているので非常に住み易い国である。根性のある人が来て働くには至極恵まれた国である。それにしても2年の契約だけは

守って欲しい。今年は50名近く欲しいという。

一方、この国では社会福祉制度があまりに徹底しているために一般に政府に頼りすぎていることは困ったことだという。

私共がこの国で強く感じたことは、この国の子ども達が実によく働くことである。日本では子どものいうことを聞くことを、子どもを大事にすることだと思い、子どもは遊ばせておいて母親が泥だらけになって働いている姿を見ると二世の人達は奇異の感に打たれるそうである。

次の日、7月29日は前ボックスホール高等学校長 (retired principal) の案内で同校を視察した。制度上学校長は辞職する意志がなければ65才まで働いていることができるそうで、辞職しても退職時の75%の恩給は貰えるようである。

何分にも通学区域が広いので小・中校を含めて16台のスクールバスが車庫に並んでいた。

この学校を視察して敬服したことは、教室・教員室・研究室その他の施設が実に整然としており、そこにある教育設備が直ちに活用できる状態にあることであった。これは掃除専門の職員がいて、いつも機能を十分に発揮できるように一日中つねに清潔整頓に当たっているからである。この人たちのことをCare takers というようで、一人の男子職員の他に夫婦がいて、この夫婦は月に900ドル(日本円で24万円)貰いが、仕事が忙しいときはこの給料の中から人を雇うのだそうである。

教育制度については、高校は全入で授業料は無料である。大学は4年で1年3000ドル位必要になる。高校卒で70点以上とっていると弁護士・医師系統の大学へ、60点以上とっていると他のどんな大学へでも入学できる。4月から8月までは休みで学生はアルバイトを行う。日系人は学業の面ではひげをとらず探出したものが多い。

高校は男女共学で、卒業前に結婚するものもあり、学校へ自動車で来るものもある。テストの時間は字引をもって教室に入り、解答に何時間も要する問題と取組むのである。生徒は学校で勉強し、家では手伝いをするのが普通である。生徒が一步校門を出たら、先生は生徒にいろいろ注意することができない。

当日は二世の人達にレスブリッジまで送って頂き、カルガリーを経てトロントには夜の12時近くに到着した。幸い事業団の長谷川さん、長野県出身の清水さん夫妻が出迎えてくれたので、その自動車で予約したホテルに着いたが、到着があまりにおそいので既にキャンセルされており、結局 Four Seasons-Sheraton Hotel という高層のホテルに落ついた。

当日は日曜日であったためかトロントの市街は深夜であるにも拘わらず、そぞろ歩きの

人波が絶えていない。商店もレストランもその時刻に開いているところがたくさんあった。日没が近い（ボックスホールでは午後10時半頃まだ明るかった）こともあろうが、一般に短い夏の夜を楽しむ気風があるのであろうか。

シェラトンホテルに落ついてやがてベッドに潜り込んだと思ったとたん、ホテルの非常警報ベルがけたたましく鳴り響いた。気の早い白人達は衣服を着換えて廊下へ飛び出す騒ぎである。それから一時間後漸く静かになったと思ったら再び警報で遂に当夜は睡眠不足これだけ止宿人に迷惑を掛けながらホテル当局から一言の詫言も無く恐れ入った次第であった。（もっとも詫言の放送があっても理解できなかったかも知れないが）

翌日（8月30日）は長谷川さんと長野県出身の矢島さんの案内でナイヤガラ瀑布の見学ができた。夜は長谷川さんの案内を受けたものと長野県人会（信和会）に出席するものとに分れた。

県人会に出席して得た感想は次のとおりである。

- 1.出席者は殆んどが夫婦同伴で、敬虔なキリスト教徒が多い。
- 2.生活態度が極めてまじめであり、日本における若者の無軌道な生活に警告を発するものが多かった。
- 3.県人会の構成メンバーがやや固定・高齢化しており、会の発展のためには若い青年の息吹きが必要である。

## Ⅱ ブ ラ ジ ル

### 1. ベレン・トメアスー

とりとり来たのだブラジルへ、私にとってブラジルは夢の国なのだ。

ヴァリグ809便、ボーイング707は午前4時ベレン空港にいつものように着陸し、乗客はうしろのタラップから降りた。空港に最初の一步を印した時、思いきりソコを踏んで、「ブラジルへ来たぞ」と自分に言い寄せた。

いかに熱帯でも午前4時はまだ暗い。だけど街へ出た時はもうバスもかなり走っていて人通りも日本の夜明けを思わせた。

その夢の国「ブラジル」だったが、現実にはあまりにもかけはなれていると思ったのが正直なところだ。空港にはたまたま国際線が同時に到着したのと出発するのがあってごった返した。まず、黒人やメスチゾ(混血)の多いのが目につき、税関検査の事務所内も異様な臭いと暑さがただよっている。その臭いが私にはどうしても受け入れられない臭いだったのです。それは、ベレンの街の中、Hotelの中、も何か同じような感じだったので、本当のところ私はベレン補在中にはとうとうベレンの良さを見出すことができず、特に最後の日の朝市の見学のときは鼻をつく臭いに「もうベレンはいい」とさえ思った。そうはいっても、もちろん悪い人々が居たのでは決してなく、むしろ淳朴な人々ばかりだったように思う。街角で買ったあのおいしいミカンが高かったけれどおつりをごまかすわけなし、アメ売りの子供はカメラを向けると全く無邪気にポーズをとってみせた。ホテルの人々もみんな親切だった。きれいに仕上げられたフリーウェイを大型の乗用車を走らせ、お城のような家に生活をしていた国カナダを見てすぐに、何もかもこれから仕上げようという混血の街ベレンへ飛び込んだから、あまりにも大きなパンチを食わされた格好になったのかも知れない。

走っている車は殆んどフォルクスワーゲン、バスは全てベンツのようだった、タクシーといえども傷だらけ、中には運転手横の前席はとりはずしてしまっているものもある。

マンゴーの大木の並木は見事なもので、その貫録はいかにも歴史のある古い街を思わせた。

ブラジルは冬だから最も過しやすい時期だと知らされてきたが、なるほど熱帯雨林気候(Af)地域だけあって冬も秋もない。日中はとても直射日光をまともに受けられない程照る。平均気温(年)27°C、湿度88%とベレン支部からいただいた資料には書いてあ



るが日中はたいてい毎日30〜34°Cになったし、近郊のカスタニアへ行ったときは「この直射日光の下を掃いてよくぞ日射病にならないものぞ」と下校中の中学生を見て驚いた。しかし聞いていた通り日蔭はそれ程（日本程）汗がにじみ出ない。あまりにも強い日射しにすぐ部屋へ入りこんだから意外にハンカチは使わなかった。アスファルト舗装とビルディングのならば街中は夕方から夜にかけてもなかなか涼しくならない。ハダカやハダシの大人や小人が家の前で夕涼みしている姿は何となく「おれ」を感じさせた。そういう暑さが人間をあまりせつかにさせないのだろうか。着いた時のベレン空港ではみんなウンザリさせられた。古ぼけた木の机に木の台の上で、ていねいなような格好でパスポートをみる。うしろへ並んでみんな早くとヤキモキしているのに隣の役人はゆうゆうとタバコをふかして手伝うとはしない。税関検査はしぐさだけが忙しそうでさっぱり能率をあげない。われわれ7人は言葉がさっぱりなのでどうすることもできない。とうとう外で待っていて下さったベレン支部総務課長の高橋氏がどこからか入り込んで下さって税関と渡りあって下さったのでそれからサーアと済んだ。けれど、高知のI先生はトランクを開けられて中の日の丸のついた日本手拭を一本失敬された。（税関検査の役人に）

日中は年中暑いのでから年中午後はみんな休憩する。初日に昼食をごちそうになって事務所に帰ってみるとカギがかかっている。3時までは休みだそうである。商店も銀行も役所も。それがごく普通のことなのだ。ベレンだけでなく、ブラジルでは南の方でも午後は2〜3時間休みになるらしい。

日本へ帰って思った。こんな暑い国で、昼休みはウドンでさらさら、土曜日も日曜日も働き続けているのだから世界的経済大国にならない方がおかしいと。

2日目は「トメアスー」視察に行った。期待のテコテコは飛行場に行ってみると20台くらい置いてある。あれで飛べるのかなあと考えていたらチャーター機が決って先ず若い3人が乗った。赤土の滑走路には水たまりもあつたがうまく滑走して離陸。操縦士は全く自家用車を運転しているような気分で、隣りのI先生もつい調子にのって日本のタバコを一諾にふかして下界の説明を聞いている。もう27年もこれを運転しているから大丈夫だ安心しておれとも言っておるようだった。トメアスー空港は200m程の滑走路が1本あつたが、ちゃんとアスファルトが敷いてあつた。

たまたまトメアスーを視察しておられた中島業務第1部長がわれわれを出迎えて下さつて、1時間近くも遅れたテコテコ第2陣をも待って下さり、急いで帰路に着かれた。

この飛行場のあるところがいわば第1トメアスーになり、現在ビメンタ栽培の中心になろうとしているところはそこから30km奥に入った第2トメアスーである。

ほんの入口であってもこれがアマゾンのジャングルである。トメアスーなどよほど大き

な地図を見なければその地名を探すことはできないような、ベレンから飛行機で40分も入ったのにアマゾンのジャングルの中ではほんの序の口である。だけど、最近文部省からどんどん派遣される教員海外研修の中でだれがこのアマゾンのジャングルへ入ったろうか。われわれは実に幸運者である。

最近サンパウロから転勤されたばかりの第2トメアスー事業所長八重尾氏は落ち着いた柔らかな若い方でどこからこのアマゾンを開き開く活力が出るのだろうかと思われたが、所内の学校建設、公衆衛生から色々の困りごと相談の仲介まで何でも引き受けねばならないとのことだったし、特に青年の教育といった面に大変力を入れておられる点は流石だと思った。これから電気を引いて新しい村づくりをやるトメアスーの発展は若い青年の方々がいかにか賢明に努力するかにかかっていることは論を待たないだろう。

チャーターしたマイクロバスがどんどん新しい道を奥へ入って行ってどこまで続くのだろうかと思っていたところ八重尾所長さんが、ここが開拓の最前線ですと説明された。若い日系人の測量士を中心に数人の原地労働者が、マッシュード(まさかり)やテルサード(手おの)を持って道の両側のジャングルを切り倒す作業にとりかかる場所であった。

「この人々がアマゾンのジャングルを切り開いている人々か」。日本に居るときに何回も世界地図を出して考えた。アマゾンの密林を開拓するというのが、赤道直下の熱帯雨林をワニやトカゲやヘビと戦いながら風土病にもめげず大木を切り倒すとは一体どんな人々がどんな風にやっておるのだろうか。

記念撮影をさせてもらうためジャングルをバックに並んでもらったら大変愛想よくテルサードを振り上げてポーズをとってくれたし、日系人指揮者の一声でさっさと動くのだった。このアマゾン密林の最前線開拓指揮者の日系人は移住事業団の浅野純麗氏であった。夕食事に仕事から帰られた浅野氏は、「あなたは岡山ですか、私は広島県出身で鳥取大学を出てここへ来ました」と話されて急に親密感を増した。色々話し合っている内にとにかく夕食後迎えに来るからボクの家で少し休んでくれということになって、夕食後トヨタのジープで浅野氏宅へ行きアルバムを見ながら大学時代の話しになった。鳥取大学といえば私の岡山大学とは同じ中国地区で、毎年中国五大学大会というのがあり、浅野氏は水泳選手としてその大会で何回かの覇者であったのだ。私とは3才ちがいで私が1年のとき浅野氏は4年生で鳥取大会のときは同じ鳥取東校のプールと体育館(私はバドミントンの選手だった)で競い合っていたのだ。あの中国五大学の歌は本当にいい歌だったと二人とも意気が合い、浅野氏はちゃんと歌詞を覚えていて自然に歌になった。「山々へだつ北南、日本海の豪快さ、瀬戸内海の優美さよ、ふるさと恋して穴道湖に」静寂そのもののアマゾンのジャングルに中国五大学の歌がひびくとは。少々目頭があつくなった。浅野

氏も少し感傷にふけりながら、奥様の出して下さったみかんをすすりながら、昨年1か月日本へ行ったときの話を思い出深く語られる。広島修道高校時代に海外への夢をみて鳥取大学林学科を選び、卒業と同時にアマゾンへ飛び込んだ。今は事業団の職員として日系二世の奥様と子供さん二人でほんとに平和な家庭を作っておられた。身長もさして大きい方でなく体重なんと47kgの浅野氏が世界の秘境アマゾンのジャングル開発の最前線で活躍されておるのだ。家内はまだ日本へ行ったことがないのでぜひ一度日本を見せてやりたいと浅野氏はおっしゃった。世界の残された天然資源の開発に体を張って努力される最前線の方々こそ最大の報いを与えてあげるべきであるというのが私の考えである。

浅野さん頑張って下さい。第2トマス事業所のみなさん頑張って下さい。

トマスは知る人ぞ知るピメンタ(こしょう)の産地である。このピメンタがパラ州経済の中心を成しておることはベレンの谷総領事さんもしっかり言っておられた。

支柱にまきついたピメンタの成木の畑は見事なものである。特に今年はピメンタが大暴騰して各農家はホクホクのようにあつたし植付けて3年もすればかなりの収穫ができるので入植者が独立するのはこのピメンタ栽培が最も早いというのが常識になっている。

因みに今年3月農大卒業後すぐ結婚されて同じ農大出の奥様と入植された池上氏(26才)も一生懸命ピメンタの支柱作りをやっておられた。石油ランプの山小舎風の池上氏のスウィートホームにお邪魔して感想を少し聞いてみた。

「実際にアマゾンへ入植されて卒直を感想を」

「聞いていた所よりよく開けていて、極端に言えば少し期待はずれでした」

「困ったことは何ですか」

「別に困ったことはありません。この家もわれわれは運がよくて空家であったのですぐ入ることができました」

「現金はどれくらい持ってこられたのですか」

「180万程2人で貯金してきました」

「現在の心境ではアマゾンにいつまでおるつもりですか」

「もちろんアマゾンに住みつくつもりです。兄もこちらへ来たいといっています」

「奥様、今一番ほしいものは何ですか」

何も不便はなく、ほしいものはありませんが、時々『いい音楽を聞きたい』と思います。

私にはこの最後のことばが耳についてはなれない。つなを引っぱってくみ上げたつるべの水を石油コンロで飲みながらふっと東京の生活を思い出し、カラーテレビのある応接間で、静かに聴いたベートーベンの名曲を思い出すときがあるにちがいない。

これだけレベルの上った日本の文化生活を経験した者が、これだけレベルを下げて生活

することができるだろうか。私にはできないと正直のところ思った。それは性格の問題でもある。

トメアスーの中心作物、ビメンタに最近病害が出てその駆除に躍起になっているのは当然だが、試験農場ではビメンタに次ぐ作物を鋭意試作されている。バニラ、丁香、ニッケの香料をはじめ、カカオ、みかんなど研究されているのだが、いずれにせよ日本人のせっかちさが、化学肥料を多く用いて早く多く収穫しようとして病虫害をまねくことがあるように素人には思えた。

アマゾン入植の歴史は古い。米をつくり、綿をつくり、バナナをつくり、シュートで一時的だった。シュート王、尾山良太氏の努力のあとを今はベレン近郊カスターニアで豪華な生活を送っておられる長男の尾山万川氏らから少し聞くことができた。今、アマゾンはビメンタに落ちついてるように見える。しかし、これが将来もずっと安定しているとはだれも思っていないようだ。なぜ将来も安定した作物なりえないか。

しかし、一時的にもガッポリと収入があればそれでいいかも知れない。

人間の幸福が何であるか、それはその人の感覚でもある。他人がとやかくいうことはなかるうが、何千万円も儲かったのならもう少し快適な住いを造ったらどうだろうと私には思った。自家発電がやかましいなどといわずに電気を引いたらどうだろう。井戸にポンプぐらいつけたらどうだろう。ドラムカンの露天風呂はでうにかならないだろうか。

いや！それがいらぬ世話というものだ。

パイヤ、バナナ、ヤシ、マラクジャ、カランボラ、カジュウ、パンの木と年中喰べることのできるすばらしい味の果樹に囲まれて、石油ランプの下でいらぬ情報に迷わされることなく静かな生活を送ることこそ人間最大の幸福であるのかも知れない。

トメアスー事業所の宿舎はやはりすばらしい、森の小鳥の鳴き声で明けた。日本の夏では考えられない全くすがすがしい朝だった。

前庭に出て大きく深呼吸した。団員のだれかがつぶやいた。太陽と緑がいっぱいですね。あまりにも大きいスケールのミドリだった。

今日もまた、最前線へ向うトラックが作業員の方々を乗せて出発した。

アマゾンのジャングルに幸多かれと祈る。

## 2. ブラジリア

ブラジル国が国富を賭けて建設した新しい首都で、リオの北西900kmに位置する。

東西10km南北13kmで1957年にグビッチェク大統領の指揮のもとに建設に着手し、1960年に遷都した、人口25万ブラジル高原のほぼ中央部ラプラタ水系とアマゾン水系、サンフランジスコ水系の分水界地帯1100mの高原上の荒地に、セメント、鋼鉄の基礎を打ち、無から1つの都市をつくり出された。

雄大な都市プランは、飛行機の形を模しており、胴体部に立法機関、司法、行政機関を配置し両翼部に居住区と商店街、文教施設をもうけるよう計画されている。

現在立法、司法、行政機関の大部分と左翼部分が完成しているが、右翼部分は未完成で、完成の時には人口60-70万にすることが計画されている。特に素晴らしいのは、広大なゴヤスの高原に沈む夕日に映えるブラジリアのプロフィルそのもの自身美しいモダンアートの造形作品である。

ブラジリアは文明未踏の荒野の中に21世紀の大都市を築き今なお建設の誓は荒野をつつんでいる。

### 3. リオデジャネイロ

海岸山脈の支脈にあたる結晶状岩石にかこまれた港は世界三大美港の一つである。  
人口420万(1968年)ブラジル第2の都市、選都されるまで2世紀の間首府であった。

海外移住事業団リオ管轄地域、ガナバラ、リオ、エスピリットサント、ミナスジェライス、の4州で面積(66万km<sup>2</sup>)は日本の約18倍におよぶ。

在ブラジル日本大使館の推定日系人総数12,600人戦後移住者800人

リオ支部管内邦人移住者の散在状況

ガナバラ州	280戸	543人	フンシャル移住地
リオ州	679戸	1475人	リオの北東150km <sup>2</sup> 移住地50-60m小丘連続地
ミナスジェライス州	211戸	373人	土壌 赤黄色ポドソル性土壌及び赤黄色ラトソルで肥よく度低い
エスピリットサント州	18戸	28人	
計	1188戸	2419人	

気温最高35.2°C, 最低12.7°C, 降雨量年間2,300ミリ南半球の夏に当る11月3月に集中する。

産物としてはコーヒー、砂糖、タバコ、金、マグネシウム、ダイヤモンド、皮革、鉄鉱石等を輸出する。

市の周辺の工業地帯には、ガラス、繊維、タイヤ、食品加工、化学、たばこ等の工場がある。1960年ブラジリアに選都するまでブラジルの首都でもあった。

#### 4. サンパウロ

##### 〔1〕 サンパウロにおける日程（8/7～8/14）

- 8月7日 リオ・デ・ジャネイロより  
コンゴニヤス空港着 ロンドニア・ホテル泊
- 8月8日 海外移住事業団サンパウロ支部訪問，コチア産業組合訪問，総領事館訪問，日系邦字新聞三社（パウリスタ，サンパウロ，日伯毎日 各新聞社訪問，インタビュー），ブラジル日本文化協会，サンパウロ日伯援護協会訪問
- （夜） 事業団サンパウロ支部，全拓連合同歓迎会
- 8月9日 総領事表敬，アチバイヤ花卉・果樹農家，南伯中央産組アチバイヤ農事試験場見学
- （夜） 総領事館招待  
セアジスベ（セアザ＝サンパウロ市中央市場）見学
- 8月10日 ジュンジアイ カンピーナスに向う。東山農場 カンピーナス農事試験場 オンブラ（オランダ植民地）見学
- 8月11日 ～ 12日 各県人会ごとに個別行動（県人訪問 観光・その他）  
（週末）
- 8月13日 中田商工・モトラジオ見学  
（夜） 移住問題懇談会
- 8月14日 イグアスーに向けコンゴニヤス空港発

##### 〔2〕 サンパウロでの見聞

先輩諸先生の報告書に詳しい。よって、当地方担当の私はできるだけその重複をさけて、私が直接に見聞したままの様子を報告する。

- (1) 「・・・県の〇〇先生」大きな声で各県人の方たちが、私達一行の名をそれぞれ呼んで下さっている。予定より約1時間遅れたブラジルの国内便クルゼイロ航空から空港に降り立ったとたんの歓迎風景だ。これまでの各地訪問には経験しなかったことだけに、一瞬とまどろ。

今までは、ほとんど事業団の方だけが、出迎えて下さり、色々お世話下さったがこんなに多数（約30～40名）の出迎えは、はじめてであった。各県人会長の顔も見える。挨拶もそこそこに、車二台に分乗し宿舎ロンドニア・ホテルに向う。こ

れがこの度の研修視察で最も長く滞在する。サンパウロの第一印象であった。宿舎で早速に事業団サンパウロ支部の津浦課長を中心に全日程の打合せを行う。

このホテルは日本人土井氏の経営。フロントでも日本語が通じる。この間にも各県人が色々を打合せのため伊員を訪問される。就寝までのわずかな時間、街に出る。サンパウロは季節の上では冬、夜は寒く、コートを着ている人が多い。

## (2) サンパウロについて

サンパウロは、ブラジル南東部、サンパウロ州の主都、ブラジル第一、南米第一の大都市である。在ブラジル日系人約70万その約8割がサンパウロ州に居住、そのまた8割がサンパウロ市内と、その近郊に住むという。たしかに街を歩いていると、多くの日本(系)人に出会う。ホテル近くのガルボン、ブエノ街は、日本人街といった感じで、日本語の看板がかけられ、食堂、土産物、洋品店が並び、日本の映画が上映される映画館もある。下がハイウエーになっている陸橋に漢字で「大阪橋」の文字が刻まれているのには、びっくりした。何か日本に帰ったような錯覚をおぼえる。それだけに、ここでは日本人の活躍が目ざましい。

## (3) 日本(系)人の活躍

ブラジルの社会において、日系人の占める地位は高く、政・官・財界等における進出状況には目をみはるものがある。

主にそれは日系二世であるが、その一例をあげる。

- 1 州長官 1名
- 2 代議士 連邦議員 3名  
州議員 7名
- 3 市長、副市長、市会議員  
市長 13名  
副市長 14名  
市会議長 15名  
市会議員 137名
- 4 参事院評議員 4名
- 5 LAFTA 会議ブラジル代表 1名
- 6 ブラジル産業組合連合会長 1名
- 7 博士 50名
- 8 大学教授  
教授 18名



- 助教授 23名  
助手 150名
9. 裁判官 5名 検察官 4名
10. 官吏 高級官吏 約40名  
その他 約1,600名
11. 教員(小・中・高) 約1,500名
12. 自由業  
 技士 1,000名 医師 800名  
 歯科医師 800名 薬剤士 700名  
 弁護士 800名  
 その他 芸能 スポーツ関係に活躍する人も多数である。
13. その他  
 警察官 ジャーナリスト 軍人もいる。
14. 大学卒業生及び大学生  
 大学卒業生 5,000名  
 大学在学学生 5,500名

以上のデータからでも日系人の活躍ぶりが想像できよう。

しかし、これは考えてみると、日本を離れ新天地を求めて、血と汗と涙の労苦を重ねて成功した移住者、一世の子供たちなのである。

これは私の聞いたことであるから、その数は正確でないが、大統領補佐官にも6名の日系人がいるというし、大蔵大臣は就任の際、教師時代の優秀な教え子を部下に引き抜いたが、そのほとんどは日系人であったという。

#### (4) 農業移住者の特色

日本人は最初ほとんどが農業移住者として渡伯した。その人達が現地でもどのように現在の地位を確立したかは興味ある問題である。

まずその特色をあげてみると、第一に頭の回転の早さがあげられる。いわゆる農業に商行為的要素を充分にとり入れいかなる作物を栽培することが、最も大きな利益につながるかという見透しを立て、それを実行することである。

第二に、園芸(花卉、蔬菜)養蚕、養鶏などでも、農業的经营ではなくて工場的经营(鶏卵製造工場的?)を行うことである。故に農業经营の中に多分に商業经营的、工業的要素がとり入れられている。しかしこれが現金取入の増大に大きな役割を果たしたことは否定できない。

第三の特色は、先に述べた頭の回転の早さにつながるが、目先の利益を非常に重視することである。これを北欧系の移住者と比較してみると次のような違いがある。北欧系の人達は、まず牧草を作り、それから牛を買い入れ、頭数を徐々にふやし、その人一代ではなく、二代、三代の後に大牧場を経営するというやりかただが、日本人は一代の間に利益をあげようと努める。また、日本人の住宅や耕作地には、観賞的な早木が植えられていない。家の近くにまで作物をつくり、きわめて取替的である。住宅が外国人に比し、粗末で資金はほとんど、農業のために投資される。

第四に投機的栽培が多いことなのである。ドイツの移住者は、粗収入が日本人より少いか、同じ位であるにもかかわらず、年賦でレンガを買い立派な住宅を建築して樹木を植えた広い庭園を造るのとは大きな違いを感じる。

#### (5) 日本人の教育熱心さ

ブラジル社会における日系二世の進出、活躍は先に書いたが、これはすべて日本人の教育熱心さからきたものである。

教育投資という言葉は、昨今、日本でもよく聞くことであるが、ブラジルにおいても、どんなに親が貧乏でも子供は、高校・大学に進学させる。そのための苦勞を何らいとわなない。ドイツの移住者が農業をするだけなら義務教育だけで充分だと、はっきり割り切って、特に優秀な子弟だけを本国に留学させるのとは大きく異なる。しかし、日本人の移住者がブラジルに根をおろした歴史の浅さにもかかわらず、ブラジル社会のエリートを多く生み出しているゆえんは、ここにあるといってよい。ただこの二世達が、高校・大学で得た知識・技術のゆえに親の跡をついで農業に従事しようとする人が少くなるのをどうしたらよいのだろうか。

(大学進学率の例：サンパウロ大学 約18%)

#### (6) 日本の企業進出と問題点

ブラジルには、多数の企業(工業、商社)が進出している。加えるに現地日系資本工業も多い。しかし、このめざましい進出を支えているのは、二世である。すなわち、苦勞した一世の子である。現地の言語、法律、財政、商慣習、現地の事情に精通した二世である。このことを忘れもし日本の企業が、巨大な資本にものをいわせて、東南アジアにおけるような活動を行えば、きっとエコノミック・アニマルの汚名は勿論、将来の日本とブラジルとの関係に大きな問題をなげかけるのではないだろうか。先進国日本の技術・資本を受け入れブラジルの開発・発展を強く望んでいるこの国の人達にとって、日本の援助協力がどうあるべきかを、もう一度じっくり考えなおす必要があるだろう。

すでに、日本の進出企業と現地で成功した日本人の間にある確執を二・三耳にしたことは事実である。

ブラジル人がきわめて親日的で、日本人を尊敬していることからみても、なおさらこの問題は重大である。

#### (7) その他

農業問題では雇用青年と受け入れ側（パトロン）の間で、いろいろな考え方の違いがあることを聞いた。

戦前の移住者であるパトロン（雇用主）が明治・大正気質で、いわゆる、のれん分け方式（独立までは、パトロンのところで低賃金に甘んじながら働き、色々な知識・技術を学び、独立の際にパトロンの援助、資金、土地購入の資本借入れの保証等を受ける）をとろうとするのに対し、戦後の青年は、それに不満で給与条件の改善を要求するなど、その調整に苦慮される事業団の御苦労も伝えたい。

また、ブラジルの労働法（最低賃金制が確立）のきびしさのゆえに、現地人を雇うと問題が起ったときに困ることが多く、（労働者として不適當であつても、一度雇用すると罷面できないし、労働能力が不十分でも、最低賃金法で定められた給料～8時間312クルゼイロ～は支払らわねばならない）そのゆえにできるだけ他人を入れないで、自家労働力を使うことがよいことも聞いた。家族、親類などの自家労働力が豊富な人が強いようである。

#### (8) 農業移住から技術移住へ

ブラジルでも最近では農業移住だけでなく、サンパウロを中心に、日系会社への技術移住の伸長がめざましい。自営開拓農、雇用農としての移住から、サラリーマン（技術）移住、企業移住の傾向が増えている。

これは今後の移住を考えるときの参考にすべきことだと思ふ。

### (3) 視察のメモから

#### (1) コチア産業組合

8月8日 午前 事業団サンパウロ支部を訪問 支部長よりブリーフィングを受けた後、市内をぬけて、コチア産組に向う。空は雲一つない快晴の日本晴れ（ブラジルではどう表現するのだろうか？）

産組会議室において、セルバジョ・井上会長（二世）と懇談する。井上会長は次のようなことを話された。

• 日本とブラジルの人的交流の必要性

ブラジル移住者の養成

移住とは落ちぶれた人がやってくるのではなく、自分の将来をかける青年がくるべきである。

先進国は、海外進出の要なしという考え方を捨てるべきである。

• ブラジルで働く日本人の態度

ブラジルはポルトガルを母国として生まれたが、現在日本人はこの国の国民の中では六位の多数を誇る。そして70万の日系人が、ブラジルの環境の中に溶け込み、環境を自分のものとして働いている。

これはどこの国にも見られないことだ。

• ブラジル事情をわきまえた進出の必要

ブラジル社会における経済進出には長い期間がかかった。ブラジル事情をわきまえない企業の進出は危険性をもつ。

特にこれからは経済（金もうけ）を、離れた進出、技術・学問的進出が大切であろう。現実にはブラジルの将来に備え、（輸出の増加）港湾の改造に日本の技術資金の援助が行なわれ、これがブラジルに大きく貢献しているという。

• ブラジルの生活

世界一 暮しよい、豊かな、たのしい生活。希望のもてる暮らし。のびのびとした生活のできる国である。一度ブラジルに来た人はブラジルびいきになる。

日本人の肩身の広い生活がここにはある。

• ブラジルにおける日本人の信頼度

ブラジル人は日本人を大へん信頼している。かしこさ、勤勉さ、道徳心の高さ、これが高く評価されている。これは無形の財産であり、これを大切にしたい。

• コチア産業組合

日本人のブラジル農業に対する貢献は万人の認めるところである。特に日本人の野菜に対する貢献は大きい。肉食中心のブラジル人に野菜を食べる習慣をつけた。

この組合は最初、作物を売ることから出発（主にジャガイモ）したが、1929年のパニックで打撃を受けた。組合員はこのため、移動するか、野菜に転作した。以後、組合の事業部門が拡大され（ジャガイモ→野菜→鶏卵）組合法が制

定されて、産業組合となり発展した。

発展の原因としては

(a) 本部の位置が町の中心で好適地にあった。

(b) 現地の人との接触がうまくいっていた。

組合にブラジル人が入ってきた。

ブラジル人に対する細心の配慮がすでにあった。

(c) 組合の部分的な問題も全体的な問題として検討する。

(d) すべての問題を組合員中心にして考える。

ことなどがあげられる。

このほか、日本の農協は政治力をもつのに対し、ブラジルでは政治力がなく、むしろ組合が政治力に対する配慮を考えねばならないことや、政府が工業優先を唱えるのあまり、農業をなおざりにするため、農業に対する注意を喚起する必要などの苦勞がある。

また、戦争や悪法のゆえに苦勞したこと組合員の依存心が強い問題と共にブラジル農業の、一層の自立性確立をねがう。

・今後の課題

ブラジル経済の要求にともなう零細農家の大型化とそのため技術、作物をどうするか。(政府より農地改革の一端とし安価で払い下げの要求を出している)

政府の援助による1戸250町歩の農家造成(作物:米・大豆・コーン・落花生・コーヒー)

・移住に対する考え方の変更

日本社会からの離脱でなく、日本の延長として移住を考えるべきである。

日本政府の援助を期待する

オランダ政府は在ブラジルの農民に対しても、国内に対する補償と同様の補償がなされているのを見習うべきである。

聞くほどに産業組合の組織の大きさや、その力強い活躍が理解できた。サンパウロ周辺にとどまらず、産業組合には全地域からの加入があるという。ベレンのメロンがこの産業組合で販売されていると聞いて驚いた。ベレンに機材を運んだトラックが帰途、安価な運搬費で農産物を運んでくるのだと聞く。一層この産業組合の発展を祈りつつここを辞した。

(2) 事業団サンパウロ支部と全国拓植農業協同組合の歓迎会

この歓迎会はわれわれ一同のほか、全拓連派遣の課員や先生方、及び神奈川県派遣の高校の先生の他われわれ海外教育についての指導者である文部省の藤原先生も同席され、色々な意見の交流ができて有意義であった。

### (3) アチパイア

この地方では約1,500家族が移住、(内800家族が花造り)している。バラ・カーネーション、洋ランが主であるが、特に副団長の高校(長野県・須坂園芸高校)出身の小川君が、パール花卉農場の支配人として活躍している様子をつぶさにみて、すぐれた青年をおくる必要を再確認した。印象的だったのは、温室にあるカトレアの花で、(これは原始林から採取交配して大きな花をつくり、鉢植えにして出荷するのだという)あの美しさが忘れられない。

### (4) 東山農場

ここは農務省の委託を受けて、色々な作物の試験栽培や、コーヒー、綿、コーンなどの種子を栽培している。

最近、コーヒーの機械による収穫が試みられようとしている。

コーヒーの木にホルモン剤を使用して一度に開花・成熟させる。

コーヒーの木の高さを一定にする

などで、人力によるつみ取りから機械化が試みられている。

カンピーナスは、海拔約600米、コーヒーの適産地であると聞く。

かつて、ここでは世界の7割を生産したが、1937年の革命で法令により、生産の禁止、制限がなされ他の作物への転作がなされたい。しかし、1949年再び生産が復活、荒地に作られたブルボン・ベルメーヨ種から、現在は、技術と土地の条件(特に稲のないこと)を考慮しつつ新種のノーボ・ムンド種が栽培されている。みはるかす、なだらかな丘陵と赤いテーラロシヤの土地に続くコーヒー園をみると、さすがコーヒーの産地だとの感じが実感として受けとれる。コーヒーの実を収穫する際、地に落とした実を、かき集める(虫を繁殖させないためにも)と農場の人夫の賃金は、それで支払えるというから、その広さがどんなものか想像できる。いや実際にみないとわからないかも知れないが……。

同農場で、藤原氏から御馳走になったブラジル1だと自負されるコーヒーの味は格別であった。余談であるがコーヒーを飲んで眠れないのは、カフェインを残すからであり、香気を重んじて、いり方が足りない故だそうである。コーヒーのほんとうの味は、思い切り炒ってその味に親しむことにあるらしい。にがいコーヒーの味を口に含みつつそこを辞す。

続いて、酒造り工場を見学した。

ブラジル産、日本酒である。ここでは日本酒が醸造されているが、そこでいただいた蔵出しの酒は、久しぶりに、日本を思い出させた。

ここは世界の三大土壌地の一つ。それは、中国の黄河流域、アルゼンチンのパンパ地帯、そしてカンピーナスのテラロシヤだと聞いた。陸上競技場のアンツーカーのグラウンドに似た土は、樹木のみどりと青い空に映えて美しい。

#### (5) セアジエスベ(セアザ)中央市場

夜、この市場を見学する。青果物が山と積み、取引が行なわれている。その種類と量の多いのにびっくりする。これがほとんど日本人の手によるものだと聞いて、更に驚く。しかし、この青果物を消化する人間の胃袋の大きさを想像すると面白い。

日本人は、自分で農場を開き、ブラジルになかったものを、供給してくれたとブラジル人が感謝するという。野菜に関する限り、ブラジルでは、日系人が全分野を独占していると考えてよいであろう。

広大な市場をまわりつつ、そこには、むんむんする人間の生活力が如実にうかがえた。

#### (6) サンパウロの企業

8月13日は中田商工とモトラジオを見学した。中田商工では太い煙突と広い野球場、サッカー場が印象に残った。社長中田勝氏から会社創業当時から現在に至るまでの苦心談、経営の状況等を伺った。

中田氏は昭和4年小学校5年のとき連れてこられて原始林の中でコーヒー園をつくったが、回りは猛獣オンサが這入り込まないように柵をめぐらし、小屋の屋根は木を割った粗木で、ひどい生活を18年間も強いられた。現在では政府も財政的援助をしており、理解もあるので、農業もこれからは良くなるであろうが、とにかく当時はひどい状態であった。このような有様であったので農業に見切りをつけてサンパウロに出てきた。社長の話は次のように続く。

父はもともと機関士であり、私自身も農業機械に興味を持ち、取扱いもしてきたので、町に小さな自動車の修理工場を持つことができた。現在ではフォルクスワーゲン、フォード、GM社等の部品を生産し、従業員800人資本金は13億円ブラジル国内における日本企業としては12～13位のところにランクされるまで成長した。

技術移住者も採用し、中には会社の中堅として、生産の重要部門を担当している人もいるが、待遇ばかり要求して実力の伴わない者もあり、また一般に辛棒が足

りないようである。人物・技術がしっかりしていれば日本円で20～25万とる人はたくさんいる。将来は50万円位出したい。

内地の職場で働いても労働条件がよいので無理に地球の裏側にまで来なくともという声があるが、当地では日本より住宅もずっとよいし、食物も豊か、野菜・果物は年中あり、肉の価格は内地の20分の1である。週44時間で5日制、土・日は休日である。

このようにブラジルには生活を豊かにするチャンスはある訳だが、このことは金儲けと混同してはならない。金はどこにでも転っている訳ではない。不真面目なのは困るが、真面目な青年は歓迎したい。

現地の人々の間に「日本は芋が煮えかかってくると、箸をさしてくる」という非難がある。われわれが昭和4年に渡航してきたときは、貧乏も徹底していて、ふとんの皮を剥いでシャツを作って着ていた時があったが、この時は、お坊さん達は一人も来なかった。今では各派の人達が来て信者の金をごっそり持ってゆく。

社長室には「着々寸進、洋々万里」という大平正男氏の揮毫した額が掲げてあった。

話が終って会社から10kmのところにあるレストランへ社長自ら運転する車に乗せられて御馳走になった。食事はシュラスコといって、牛肉・豚肉・鶏肉・リングキッサ（腸詰）等大きな刀のような串にさして炭火で焼いたもので、これにドレッシングをかけて食べる。大きな肉がこれでもかという具合に出てくるので大抵のものは辟易するが、食事後パイヤをデザートに頂くと案外すっきりするものである。食卓には御飯・パン・マンジョカの粉・サラダ・フェジョン等がつく。

また食事のために10kmもと驚いてはいけな。この社長さん自身も時々鳥を撃ちて1,000kmのところへ出掛けるそうである。

午後はモトラジオを訪れ、社長尉島博氏のお話を承り、御案内も頂いた。

この会社も、もとは小さな町工場で、1940年頃からラジオを生産し、一時はテレビも作ったが現在はカーラジオに主体を置いている。従ってカーラジオでは外国企業の中で一番大きい。資本金は7億4,000万円で従業員は1,500人程いる。労働者の移動が毎日あるので社長自身今日現在の労働者の実数を掴むのが困難のようである。会社の上層部の人達も毎月10人程引き抜かれているが、移った人の中にはその後技術を伸ばしている人もいる。

社長は昭和11年にブラジルに渡り相当のブラジルでの経験があるので、青年達にブラジルの生活はあせってはいけなということをお教えたい。技術移住できた人



も30~40人いるが「ブラジルに来たら生活の保障はしてやるから、すくなくとも2年は頑張れ」といいたい。ことばの問題にしても1年や2年では機微に触れたことにはならない。場合によっては誤解のもととなることがある。

この社員は向学心も旺んで、80%は学校に通い、そのうちの20~30%は大学で学んでいるという。

この会社の特徴は部品の製造を下請けに出さないで、全部自分のところで作り、その部品を作る機械も自分のところで作っていることである。従って人間の数も多いわけで、労働問題はこの会社が解決しなければならない大きな課題の一つであろう。

夜は移住問題懇談会があり事業団サンパウロ支部から白石支部長他、ブラジル訪問中の東京本部仁科業務第2部長、現地から農業代表の唐沢さん、工業関係の今井さん、現地の大学から斉藤先生とわれわれが出席した。

斉藤先生の発言「ブラジルとしては工業化を進めたいのだが、工業化を進めると頭打ちになるので、農業を振興する政策をとらざるを得なくなる。日本からの移住者は農業労働者としては考えられないので、品種育成、栽培法、品質管理等を掌る農業企業Agribusinessは今後面白いものになる。畜産も面白い。」

今井さんの提案「今後は資本・技術・経営力の移住が問題になるので、優秀な人に来て貰いたい。またブラジルにはろくな研修機関がないので、海外移住事業団がそのような研修機関を作って、各社がその費用を分担したらどうか。」

唐沢さん「農業関係者として移住する場合、パトロンの援助を受けて成功する場合と、農業土木のような技術者として移住する方法があるが最近では後者のような方法が適しているのではないか。」

最後に仁科部長から「ブラジルに来たら最低1年は腰を落ちつけて頑張ってみる必要がある。そうすれば南アメリカの物指しができるので、そうならたらアルゼンチンでもどこへでも出掛けて見るのがよい」という発言があった。

ふりかえてみると、サンパウロこそ、ブラジルの中の日本という感じがした。

日本人の肩身が広い、井上コチア産業組合長の言葉が思い出される。

「アチパイアで昼食に立寄った際、出会った在ブラジル40年という老人が、「ブラジルはいいですよ」と言った言葉が忘れられない。

期間中、最も長く滞在したサンパウロに別れ、再び機上の人となって、イグアスに向う途中、再びここを訪れることができる日の近いことを祈った。

「人種・宗教にとらわれず、あらゆる国の人を入国させ、ブラジルの発展に寄与さ

せるべきであるという、大きな気持をもったブラジル。人種差別のない国。無限の可能性に生きる青年が思いきり自己の能力をためすチャンスが多くある国。……この国を象徴するかのようなイグアスの滝を見物、その景観に見とれ、もう一度、ブラジルの広大な国土を再確認し、友情の橋をこえて、次の訪問国、パラグアイへと向った。

## 5. ブラジルの風土

今度の研修視察では、本来の目的は勿論であるが、更にもう一つの大きな期待は私が、日頃からささやかな研究を続ける「風土」の実際的な勉強のできることであった。四年前に東南アジア6か国の風土に接し、今度はアメリカ大陸の風土に足をふみ入れることができる幸運は、私の大きな喜びだった。

自然的環境条件を土台とし、その上に精神風土がつくられ、さらに生活としての文化が生まれ、高度の精神文化がその上に築かれるという「風土論」は私の興味ある問題である。

自然の条件と人間のかかわりあい、これをどう考えるべきか、それを少しでも今度の視察で知り得るならば、そう思いつく、旅行を続けた。農業関係の先生方が多かった一同の中で、私のような者の存在もまた別な意味があるかと、自分で勝手な理由をつけて、私の感じたブラジルの風土を書いてみたい。

自然に対する人間のたたかい、それはその人間がおかれた地理的な条件によって異なる。洪水とのたたかい。嵐との或いは砂漠とのたたかい、それを通して人間は自然にいどみ、人間の生活・文化を樹立していく。自然環境が人間を変化させるのか、それとも人間の自然への働きかけを通して民族の気質・体質ができてあがるのか。それはすぐに結論を出せないだろう。民族の風土的性格がどうしてできてあがるのか、大それたこんな課題をもって南米に足をふみ入れた。

ベレンの街を歩きつつ、ブラジル人の生活を垣間みたり、トメアスーに向う、テコテコの機上から、原始林や再生林、そして焼かれた後の開墾地を眺めたり、それらをぬって、くねるアマゾン河の支流をみたりすると、そこにはやはり大自然の偉大さと、それにいどむ人間の力の相違を感じる。

ブラジルでは、前近代的なもの、近代的なものが併存し、西洋的な、もちこまれた文化と、赤道直下にはじまって南にのびる広大な国土独特の文化とが、あい矛盾しながらも、奇異な感じを与えずに共存しているように思えた。

当然、有史以前からそこに生活したであろう先住民の文化、西洋移民の文化、それらの風俗、習慣、因襲などが、いつの間にか入り混って、時間の経過とともにゆっくりと発展をとげて来たというのがブラジルの文化であろうと思う。

これから原始林を開くために、測量をしていた第三トメアスーの農園予定地でみた樹木の風物と、人間の生活力がむんむんするベレンの朝市、そしておよそ人間性を没却してしまったような、あまりにも整然と計画化された、ブラジリア。そして観光地的なりオ、南米のニューヨークといわれるサンパウロ、それぞれの様相が国土の広大さのゆえにそれぞれ

れ異なるのだと、はっきり割り切れるだろうか。

在ブラジル40年という日本の老人が、ブラジル人は感性的で、特に東北ブラジルの人間は狂暴性がある。それは最初、ポルトガルの罪人がそこに住みついた影響からだといった論理に組みし得ないにしても、ブラジルという広大な国土の精神文化をどうとらえるべきかに迷った。

ただ、アマゾンの本流をみるチャンスには恵まれなかったが、アンデスの雪どけ水にはじまって、緑の大地に降った雨水も、高原の水も、スコールもすべてをあわせのんで、滔々と流れる水を想うとそこには、悠々たる人間の生活と精神があるような気がした。

「明日があるから」こんな言葉がよくどんなときにも使われると聞いた。勤勉な、別な表現をすれば、せっかちな日本人はこのような態度をとる現地の人達を批判するが、それは、決して彼等が怠惰であるのでも、無責任であるのでもなく、自然の条件からくる奔放さ、おちかたの故であると思う。午睡の習慣もまた生活の知恵が生みだした体力や思考力の消耗を防ぐ、最良の方法なのだろう。

われわれのように、些細なことにまで細い神経を使っては、とても、その環境に適応できないのではないかと思った。

しかし、それがかつては、ヨーロッパの植民地支配を許し、アメリカ経済の進出におびえ、今また経済大国、日本のエコノミックアニマル的進出に侵されようとしている。豊かな天然の資源と人的資源に恵まれながら。

人種差別のないことはブラジルの大きな特徴の一つであるが、これは何が原因だろうか。人種無差別を憲法に成文化している政治上の明白な事実は大変なことでありと尊敬するが、それのよってきたるところは、どこにあるのだろうか。

人種の多様性 ~ これは街にでると、はっきり知ることができる。

白・褐・黒・黄、その割合は異なるが、街頭にしばらく立っていると人種の展覧会のように、一人一人がどんな人種か、或はどの人種との混血かなどと想像すると一日いてもあきない。

私はこれも、広大な国土ゆえと、場所によりわずかに変化する地理的な条件のゆえと思う。しかし、このような多種類の人種と、19世紀以降の移民 ~ 母国の文化を身につけた ~ のとの間に、今また新しいブラジルの文化が生まれ、統一されて明日にむかって伸びるブラジルが建設されつつある。この姿をみると、自然の条件が人間の文化(生活様式)をつくるという考えよりも、民族の風土的性格は、人間自身の自然に対する働きかけが、人間の文化を生み出して行くということにもなりかねない。砂漠地方では、人間の団結心が強いという。それは自然の条件がそうさせたのか、それとも人間が、それをするに

よって自然とたたかったのが論点となることと同じであると思う。

しかし、現実には私がみた移住している日本人の姿をみると、海外移住の問題点を別として、私の風土に対する考えを基盤にしたとき、人間の自然に対するたたかい、自然に働きかけて人間が変化すると主張したい。それは、シュートやコショウは、日本人がはじめて栽培したもので、ブラジルの国民を驚嘆せしめ、それがこの国の経済をうるおすことにとどのくらい貢献したかという例からもわかると思う。

野菜についても然りである。

サンパウロのように、母国の文化が移植され、形をかえて定着しているところのような移住社会の特性をはっきりしめしている土地は別だ。これは、決してブラジルの風土になじんでいるのではなく、ヨーロッパ文化を先にした社会の中で東洋的な日本の文化が特異なものとして存在するのである。

広大な国土、水と森林の無限に広がる国、豊富な地下資源、開けゆく大地～ブラジルの風土は、日本とは異なるけれども、そこは「人間最後のフロンティア」などと称せられるところではなく、拓けつつあるこの国土に、文明の総合的な開発協力が、いかにかかわるかということであると思う。それがまた、ブラジルの風土に大きな変化を及ぼすのではないだろうか。近い将来、再び私はブラジルを訪れ、今度は移住文化をできるだけ離れたブラジルの風土に接したいとねがう。そして、他の文明がブラジル固有の風土にどうかかわっているか、それをみたい。

長い年月がかかるだろうが、それが人間の自然に働きかける姿を知る大きな手がかりになるような気がするからである。

### Ⅲ パラグアイ国

イグアス河にかかる友情の橋、手前がブラジル、向いがパラグアイ国である。ブラジル出国手続きには少々手間取ったが、パラグアイ入国は極めて簡単。事業団支部の手際良さと税関もOK、荷物は車に積んだまま何んの調べもない。

いよいよパラグアイの地に一歩足を踏み入れたのである。そしてイグアスの移住地まで舗装道路をまっすぐに走ること40km。途中対向車も少なく移住地としてブラジルに比べ相当遅れている感じがした。道路の両側には原始林が多く、移住者の建物も極めて貧弱なバラック建てである。原始林を伐採した木が黒く横たわっているのも入植の新しい証拠であろう。車がイグアスの移住地に着いたのは午後の4時頃であった。

イグアス移住地には今から13年前14家族が入植して以来、現在は251戸、627名に増えている。

標高：平均250m 最高329m 最低182m

気候：平均気温21.7℃ 年間降雨量1,900mm

イグアス総合試験場も2年目を迎え、計画的に建築中であつた。試験場の重要性から将来を考え、意欲的に、広大な土地1,000haを構え、畜産・養蚕・果樹・野菜・コーヒー等の試験計画を立案していて、今後は十分期待ができそうである。また、研修生受入れの宿舍等も建築中である。

教育については、当地区には小学校が2校あり、生徒数173名、うち日系人は86名の半数を占めている。極めて教育熱心なことは日本と変りがない。

医療施設についても、イグアス診療所には、医師1名看護婦3名、事務員1名がいて、救急車も持っている。

また、治安についても警察署があり、判事1名兵士8名も配属され、移住地としては比較的整備されているようである。

東京都出身の石田さんは、ドミニカ動乱後イグアスに来て8年、養蚕農家として堅実に頑張っている。高知県出身の和田さんは、移住して15年生であるが、イグアスは4年目で、もう養鶏(卵)6000羽も持ち、立派な家も建てている。当移住地には平均6~7年の人々が多く、将来に大きな期待もてる。

パラグアイ到着の夜、事業団エンカルナシオン事業所の関係者全員が参加して催された、野外パーティー式歓迎会の焼肉の味は今も忘れられない。

今日は8月15日、日本では終戦記念日、パラグアイは大統領就任の日として4年に1

度の祝日である。午前10時40分海外移住事業団支部のあるアスンシオンに向け出発した。286kmを特急バスで、途中2回の休憩と昼食の後、パラグアイ国の首都アスンシオン市に着いたのは午後4時過ぎであった。初めて日本人の経営する内山田旅館に泊る。夜は日本語学校の先生4名の出席で教育問題についての話題が多かった。

パラグアイは女が木から降ってくると聞いたが、1864年、三国同盟戦争での敗北当時、人口50万人中、男子は3万人しかいなかったという。また、1932年にチャコ戦争が起り、国力は更に弱化したという。当時は確かに男の数は少なく、教会においても男1:女22~23で結婚を認めたという話である。

義務教育は、日本と同じく6・3・3制であるが、大多数の児童は未就学児である。学校は3月に始まり12月に終る。1月2月は夏休み、7月は冬休み、その他祝祭日が非常に多く、町の独立記念日は当然のこと、父の日、母の日、先生の日までも休みである。年間、祝祭日は約30日、それに雨が降れば学校は休みというから面白い。(雨が降ると道が田圃の如くなる。)何時どの程度の雨が降れば休みかと聞くと、雨が降っておれば当然のこと、降ると予測すれば生徒は登校しないので、自然休校になるとのことである。授業は午前の部、午後の部に分け、各々3時間位の授業があるという。教科書は1冊で、全教科が書かれている。アスンシオンから40km~50km離れた地区では、「はだし」の児童は50%~60%で、遠く離れた場所程ひどくなる。それどころか遠隔地にはもう学校はない。先生午前の部と午後の部の授業をして初めて一人前の給料をもらえる。しかし、何時も遅延するので、現金で品物を買えず、先生用のチケットで買うという。田舎では警官も平常は牛を飼い、作物を栽培し、なにか事件が起これば服装を整えて出勤するという生活であるらしい。

アスンシオンは人口35万~40万、エンカルナシオンは35,000人~40,000人で確かな人口調査は無いと言う。また、パラグアイの国は山がない。面積は日本とほぼ同じ。人口は240万人と極めて少なく、田舎に入れば人に会うのがむずかしいといわれる。人口密度が5.7人とは、想像も出来ない。

8月16日9時30分、市内を出発。30分位で郊外に出る。360km先のエンカルナシオンに向ってバスは走る。自分達を入れて約25名。空席が半分以上。途中、昼食や休憩を含め、3~4ヶ所以外は無停車にて、目的地に着いたのは、3時30分。早速事業団エンカルナシオン事業所に行き、当地区の現状報告や、移住地の概況の説明を受けた後、二台の車に分乗して70km地点のアルトパラナ移住地に着いたのは、7時30分頃。ここでも当地の概況を聞き、移住地宿泊所で泊となった。

#### ○アルトパラナ移住地

朝8時起床、一点の曇もない今朝の気温は7°Cという。二台の車に分乗して移住地の最先へ行く。原始林の中を道路だけがつけられ、区画割の最前線を見学した。数年後には、立派な畑となるのであろうし、土地も肥沃で将来性のある地区だと考えた。途中、40名位の若者達が手に斧を持ち、原始林を切り開いているのが見られた。パラグアイ国での軍隊である。平時であり、軍事教練もないのか、食糧に困っているのか、軍隊が貧乏なのか？、何処の国の軍隊でも何かしら軍入らしさがあるのに、この国では単なる若者の集まりという感じで、しかも「はだし」で作業をしているのは、特に注目せねばなるまい。

当移住地は85,000町歩で佐渡ヶ島と同面積である。13年前の8月2日に最初の移住が始まり、現在は334家族1,558人となっている。主幹作物は油桐・大豆、玉蜀黍であるが、油桐は価格の問題もあって、最近伐採の傾向にあり、高値を呼ぶ大豆、馬鈴薯への転作者が多い。また、3年前より養蚕も軌道に乗ってきた。片倉・伊藤忠の合同会社も進出している位である。

当地区は8つの林に分れ、更に53の部落よりなり、8つの村から議員を選出し村長もいる。小学校は3校あり、6年まで義務とし、31%が中学校へ進学している。中学校は50km離れたフラム地区へ全寮制で入学出来て、教育には不自由はしていない。

交通については、バスがエンカルナシオンまで、1日6往復はあるが、其の他の道路は、良好とは思えない。また、日本語学校の生徒も195名で、母国日本語の勉強をしている。大学生として現在5名も進学しており、卒業後の活躍が期待される。

入植後13年と言うと、10才で入植した人は、今23才の青年である。小学2~3年の時に移住し、不自由な生活環境に負けず、今の成果を勝ち得た人達であるが、移住の谷間の人になっている。今後は教育行政や、公民館活動、青年団活動により、過去の教育を補わなければなるまい。将来一家の柱となり、農業経営者となる人が無学者では、子供の教育は出来ず。現地人化していく心配がある。そこに今後の社会教育や、文化施設の問題もあるだろう。

#### ○フラム移住地

アルトパラナ移住地より4年古く、220家族が移住している。油桐・大豆・養蚕等が経営の柱となっている。入植後17年といえば、もう立派な農業主だ。農場も立派に整理され、遠々見渡す限りの麦畑を見た時、「農業とは一粒の種を育ててやまぬ精神ある如く、努力の結晶である。」と感慨無量でありました。

当地は海拔150m~300mで、主として、養蚕は台地の方で盛んである。養蚕は年10



回の飼育が可能である。恵まれた立地条件と、養蚕技術により、前途は明るいと思う。

或る農家は養蚕にて100万ガラニー（約200万円）その他大豆・バナナ等多角的経営を行っている。家計費は月平均27,000円であるから、今後の農家経済の見通しは、明るいことが知れる。

フラム中学は、移住地唯一の公立中学であるが、現地人等含め、日系人以外は数名である。日本は教育の国であるといわれるように、この移住地も同じである。今後、この中の中学生が卒業して、一家の経営主となる時は、村の指導者は勿論のこと、町の指導者、国の指導者は日系人によって占められるものと思われる。そういう日も間近いことであると、日系人の今後の活躍に期待するものである。中学生は、私達日本の高校教師団のために、野外演奏会を開いてくれた。パラグアイ国にて、日本の音楽を聞いた時、何かしら涙がこみあげるのを感じたのだった。

中学生と別れを告げ、50kmの道をエンカルナシオンへと帰途につく。午後は7時より、領事館招待の夕食会に参加し、日本食を十分御馳走になった。そして、パラグアイ国と別れを惜しむ最後の夜となったのである。

8月18日エンカルナシオン市の搾油工場の見学後は、パラナ川を渡れば（30分）もうアルゼンチンである。

## Ⅳ アルゼンチン

8月18日(土)午後1時エンカルナシオンからポサーダスへ渡り船で約20分、このパラナ川は巾約2kmでこれが国境である。エンカルナシオンの人口は約35000に対しポサーダスは150,000で大変活気にあふれた街である。さすが白人の国といわれるだけあって街行く人は大きく清潔である。5時ポサーダス空港を後にして南米最後の訪問国アルゼンチンの首都ブエノスアイレスに向う。飛行機はコリエンテス、ロザリオに立寄り7時40分ブエノスのエセイサ空港に着陸した。空港には事業団ブエノスアイレス支部職員の渋谷、細川、生野氏を始め県人会の方々の出迎を受け直ちにホテル“ノガロ”(nogaro)に案内され日程を聞く。

アルゼンチンに於ける日程は19、20日の二日間で19日は日曜日であるが早朝よりエスコバル等近郊邦人移住地の視察を行い20日(月)午前中事業団支部を訪問、午後県人会訪問、夜は事業団支部との懇談会と本当にあわただしく、この国を知るにはあまりにも時間が短かすぎる様な感じがした。

アルゼンチン国は日本の約8倍の面積を有し総人口約2500万人、その内日系人約25000人でその80%がブエノスアイレスの市内及び近郊に住みその殆んどが花卉、野菜栽培を行い安定した生活をしている。我々は花卉育年の移住地の一つエスコバル近郊を視察する事になった。ブエノスアイレスより約60km車で1時間位の位置にありここが日系人の花卉栽培発祥の地と言われている。ここで斎藤、玉置、中昏根、山之内各氏の農場を訪問した。

ここは入植後平均5年位で主としてカーネーション、バラ、菊等を栽培しビニールハウスの1棟が40m×6m(240m<sup>2</sup>)で1戸に10～20棟が整然と並び耕作面積は1～2haである。切花の出荷にあたっては次の様な事が聞かされた。

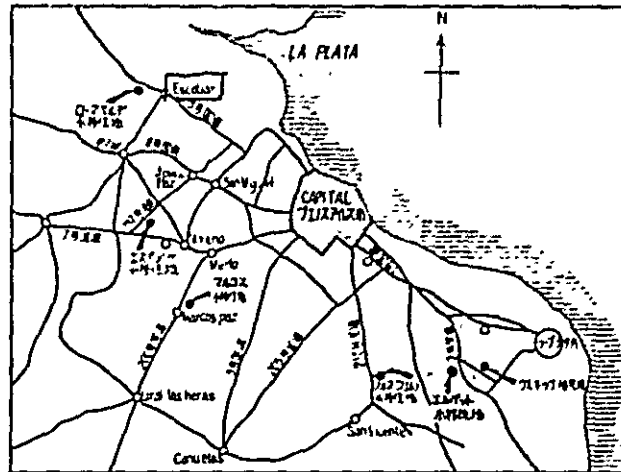
1. どの様な花でも出荷時開花していなければいけない。
2. 花は大きい程価値が高くまた、原色を好む。
3. 季節によって価額の変動が著しい。
4. 国及び家庭での祝日やプレゼントにはよく花が用いられる。

以上の点から今後の花卉栽培にあたって種々検討されなければならない点もあるのではなかろうか。その一つは鉢物である。これは今後この国で大いに研究されるべきである。

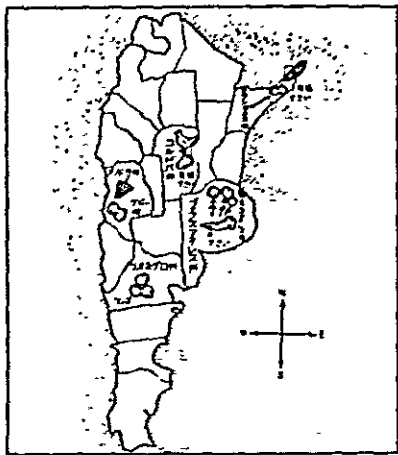
次に庭園樹木である。生活水準が向上し住宅建設が進めば当然必要になってくるものと考えられる。ここで戦前移住者として花卉栽培に成功された久樹さんの邸宅を訪ねたが、

ここは庭園と温室があり即売所にもなっていて日曜日でもあったためか沢山の家族づれが庭園(荒我苑)を散歩し温室を一巡して、欲しい花や鉢物を購入していた。また、経営農場は10km位のところにバラ30ha、オートラキント12ha、コネヒートその他沢山の種類の栽培を試みている。バラも切花から最近鉢物が相当出荷されているようだ。また、近年この花卉栽培と併せて養蜂が注目されこれこそ日本人の特技だと云われている。

また、マリーゴールドの花の色素(キサントフィア)を粉末加工し養鶏飼料に加える事も考えられていると聞いた。この周辺にはヨーロッパ系移住者による花卉栽培も盛んに行われ今後生産過剰も考えられる点から経営の安定化のための花卉栽培の方向及びこれに関連した経営が考えられなければならないことを痛感した。



ブエノスアイレス市及び周辺図



アルゼンチンにおける  
日系人居住地域の栽培作物分布

次にブエノスアイレス州以外にコルドバ、ミシオネス、メンドサ、リオネグロ等各州に散在する日系人は各地域の特殊性に応じ養鶏、果樹(ブドウ、桃、ミカン、リンゴ)野菜栽培等を営んでいる。また、アルゼンチンの主な農産物としての小麦、畜産(肉牛)等は現地人やヨーロッパ系移住者が主で数百人の大地主が大部分の土地を所有して高額所得者として軍部や教会と共に国の権力の有力な担い手であるから農地改革もなかなか進んでいない。従って日系人移住者にとってもこれらの点を考慮すべきではなからうか。

アルゼンチンの夕食は遅い、午前2時頃までレストランが開いている。真夜中でも満員の店が多い。アルゼンチンのタンゴはあまりにも知られているが本場でのタンゴはまた、格別である。

翌日事業団フェノスアイレス支部及び領事館を訪問し現在のアルゼンチンの国情や移住事情について説明をきく。その概要は次のようである。

軍政失敗で民政移管により5月20日カンボラ大統領が就任したが、今ペロンが帰国して9月にその選挙が行われようとしている。しかしこの国は最近社会福祉に資金が多く投下されそれは到底我が国の及ばないところであろう。1年間に2%、ここ10年で20%しか所得が伸びず輸出品の30%が工業品である。それは農業立国のこの国が今工業化を進めているためである。肉、魚は総て自給し海外に対する輸出主要国である。

最近政情不安が国外で伝えられているが、国民はそれ程関心がなくラテン系独特の陽気で現実主義型である。

次に移住に関しては受入国の政情、経済及び考え方が問題であり、この国はヨーロッパ系を優先し、戦後ようやく日本人の存在を認め歓迎しているが黒人は未だ殆んど居ない。東洋民族も、現在日本人と韓国人が主である。

数年前より政情、経済が悪化し、特にインフレが進み国の経済力が低下したが昨年デノミを実施し本年は少し安定している。しかし、国際競争では劣り、農産物の生産に対する資金投下がおくれ都市集中が著しく、極たんな土地私有化による経済的バランスがくづれているのが特異現象である。

移住問題はこの国の広大な土地と人口増加率から今後は技術開発が強く望まれるところであり、これは職業的関連がある企業の進出、資源の開発に進展させなければならない。

移住とは日本と異質のその国の文化の中で日本人がどうして生きて行くかが問題であり、異質文化に果した役割とは移住者の生活がその国の中でとけ込まなければならない。従って移住の成果は一世のみでなく、二世、三世に至って初めて評価すべきである。

以上の説明を聴き今後我々が海外教育を進めるため大いに参考になった。

午後は市内を見学し夜事業団支部の方々と商業学校、工業学校の先生各2名と共に会食をしこの国の教育事情を知る事が出来た。

先づ教育制度については小学校は6才より7年間、中学校は13才より5年間、大学は6年間で標準であるが工業学校は6年間である。その前3年間は基礎科目（教養科目）で後3年間は実業科目で、いづれも国立、州立の外にカトリック系の私立があり、すべて単位制度で単位がとれなければ原級にとどめるが追試験をして進級させている。

次に中学校（日本の旧制中学校と考える）の生徒に関する問題点は矢張生活指導であり、この点に力を入れている。また、進路については個人の適応性を考えて指導している。

以上簡単ではあるが大変参考になった。

8月21日午前7時旅館発空港に向う、冬の朝まだ明けきれず朝もやが立ちこめ、街行

く人々もオーバーの襟を立て車の窓ガラスも曇り郊外に出ると霜が残っていた。8時空港到着、事業団ブエノスアイレス支部の方々や、和歌山、岡山県人の方の見送りを受け9時エセイサ空港を発って帰路についた。いよいよ南米にさよならをする日がきた。

途中アンデスを超えペルーのリマ空港、コロンビアのボコタ空港、メキシコのメキシコシティー空港に立寄り、ロサンゼルス空港に着陸したのは午後11時20分(時差3時間を遡る)実に17時間の飛行である。事業団駐在員の佐々木氏の出迎えを受け、直ちにホテルに一泊、翌22日ディズニーランドを見学し、午後3時30分ロサンゼルスを後にして6時ホノルル空港到着、23日午後4時ハワイを発って最後のコース東京に向った。長いようで短く、広いようで狭い地球。夢のような感じすらしてならない。

出発以来すべて外国の飛行機で日航機が最終コースであった。サービスは最高、スチュワーデスもなつかしい。いよいよ羽田到着、本当に人の数の多い事を今更ながら痛感した。

最後にこの度の海外研修旅行で格別のご尽力をいただいた、海外移住事業団の方々、そしてご親切にご援助、ご指導下さった在外公館、各地の移住者の方々に改めて厚くお礼申し上げます。

## 視察ア・ラ・カルト

### 1. 幸先よし

7月24日総ての準備を終りいよいよ出発となってカナダ大平洋航空より電話があり、東京6時05分発CP402便は定員オーバーで若干名乗れないと急ぎよ搭乗手続を先にすますべく事業団本部の吉村係長と先発する。吉村氏の好意ある交渉により3名だけファストクラスに乗り替えるとのこと。さて困ったその3名の選こうをどうするか？吉村氏曰く「それは年令願がいいと」しかし私は最初から7人の団員の中に気まづい空気の流れることを恐れた。

果報は寝て待ての通り空港でコーヒーを飲んで待った。吉報が来た全員ファスト・クラスにしましよと、これは幸先よしこの旅行はもう成功だと心の中で快哉をさげんで何度もお礼を云った。

ちなみにファスト・クラスは席は広いし、サービスはよし食事は洋食フルコースに近くまい、スコッチもビールも飲み放題無料。カーテンの間からエコノミークラスをのぞいて少々うしろめいた感じだった。有り難うございました。

### 2. サシミディナー

バンクーバーの夜(32日間を通じて案内のなかったのはこの日とホノルルのみ)皆んなで話し合った結果昨年度視察団が会合を開いたと云う舞子ガーデン(日本食堂)

に行くことに衆議一決。ブラブラ歩きの末やっとなりついて日本食サシミ定食を注文した。ところが出された料理、先づ1酢のもの、2てんぷら、3やきとりの順述にこれは何かの間違いでないかと聞いてみたがびんと来ない、次が米の御飯とつけもの、やっぱり違ったと誰かが云う。食事をすましたら刺身が遂に来た。喰べ難い順序です。御注意あれ、この代金しめて3\$50セント？誰か米の飯に味噌汁、つけ物それに冷や奴を喰って涼しい顔をしていた者がいた。

### 3. 海外移住事業団の在外事業所

第一線で働く事業所長さん、ほんとうに御苦労さんです。

今度の研修旅行中その仕事に対し最も敬服し最も感謝申し上げたいのは事業団第一線の現地所長さん方です。

トメアスー、イグアス、アルトバラナ等何れも例外なく偉大なる任務、見るもの聞くもの総てが驚異でした。家族ともども山の中の所謂、日の当らぬ場所での生活、それなのに少しも卑屈でなく明るく仕事に全能力をかたむけている様は全く頭のさがる思いである。その内容をみると土地購入分譲、雇用関係、移住の世話資金貸付、耕作技術指導、教育関係、医療施設、治安関係等々教えあげればきりが無い。村長さん、署長さん、機長さん、病院長さんから農業

改良普及員、生活改善相談員等々として休日も昼も夜もなく全く献身的な奉仕である。

それ等の偉大な力があの第一線移住地を支えて今日あらしめているのである。

事業所長さんサルーどうかお元気で頑張ってください。

#### 4. 自動車(カナダとブラジル)

広い大陸のこと日程の都合もあって行動は総て飛行機と自動車であった。この自動車についてカナダの農場視察は大熊・金川・山下氏等の好意によりその車で案内を頂いた。この車が何と素晴らしいクライスラー、キャデラック、ピックの豪華な新車であった。しかし、この車が広いカナダの農場を埃を付けて100Kのスピードで走り、時には圃場に乗りこんで馬鈴薯やグリーンピースの収穫機を追っかけてくれた。一寸内地では想像できない国である。

ところが一歩ブラジルに入ると、うす汚れた傷だらけの車である。私のみたくタクシーのワグンはうしろのトランクが上っていたし、また、運転手の横の席がこわれ放しの車もあった。前、うしろ、横にどこか傷のない車の方が少ない。要するにブラジルでは外観より満足に走ればいいと云うことらしい。所変れば品変るか?あんなタクシーは金を出してのるのが恐しい気がしてならない。

#### 5. 教育懇談会(ブエノスアイレス)

事業団ブエノスアイレス支部のはからい

で一夜教育懇談会がもたれた。

出席者 現地工業高等学校の女教師並びに商業高等学校の女教師と事業団支部の渋谷・生野さんほかそれと我々7名で気楽に懇談が出来て大変有益であったと思う。

その中で女教師の質問

「日本人は年をとっても若々しく、なかなか元気で魅力的である。年寄らないのはなぜか」。

この答えは敢て記すまいそれぞれに考えてみて下さい。

視察団員の質問

「日本人はどう思うか」に対し、日本人は誠実で勤勉である。一生けん命に仕事をし人間的にも正直でなかなか優秀な国民であると。

彼女更に曰く今般でもひまがあれば是非自分の家庭に遊びにおいて下さい十分お話ししたいと。

また、続けて一度金をためて日本の視察に参りたい希望であると。

これに対しそれ迄にスペイン語をマスターして案内致しますので是非日本において下さいと日亜親善を深めるべく大いに外交辞令をふりまいた。

アルゼンチン時間で彼女たちの来会がおそく時間が少なかったのは残念であった。

#### 6. 一樹の宿り

「空の広大なる国」(Land of Big Sky)カナダのことをこう表現するという。平原から出て、平原に沈む太陽、見渡す

限りの平野、そのところどころに、高い樹木の集りが望見される。その樹木は、防風林で、その下に住宅があるのだ。

水平線の中に点在するその風物こそ、大平原の中にある人間の生活の本拠なのだ。「一樹の宿り」とこんな語をカナダの広大な土地で、確認しようとは思わなかった。国が変れば、またその言葉の実感も異なるものである。

#### 7. 非常災害に対する外人の態度

カナダ・トロントで深夜、火災報知機がなった。廊下に出てみると、外人はすぐに潜り込んで、エレベーターや、非常階段へと急ぐ、それにくらべてわれわれ一同の落ち着いた態度はどうだろうか。それは何かの間違いだからよかったが、もしほんとうの火事だったら34階の高さからどう脱出しただろうか。外人と日本人の災害に対する感覚の違いを、まさかこんなことで知るとは、予定外の勉強であった。

#### 8. 日伯援護協会の援護を受ける

サンパウロで風邪を引いた私は、高い熱を出した。外地で病気になるというのは一層不安なもの、事業団支部の職員に案内され、前日、訪問した援協に行く。

援協は、日本人移住者のため、1移住者福祉事業、2保険衛生事業を主にして、日本人移住者の生活面における扶助救済、生活相談、診療などを行ない、日本人移住者の大きな力となっている。

ここで二世のドクターに診察を受け、たいしたことはないと言われて一安心した。ブラジルは医薬分業で、援協でもらった処方箋をもち、薬局に行き、薬を買い、注射をしてもらった。援協のお世話になり、医薬分業の実態を実際に体験した団員は私ぐらいのものだろうか。

ただ、申訳けないが、薬局でブラジル人の薬剤師（老人のゆえもあり）から注射を受けるときの瞬間のためらいは、何が原因だろうか。二世のドクターに注射をしてもらいたいと思って医薬分業にふと抵抗を受けたのは、私の疑い深い性格のゆえだろうか……。

#### 9. 正しい姿を生徒に伝える必要性

「先生、おみやげをたのむよ」。

「土人に搶でつかれるなよ」。

「ピラニアやワニにかまれるいでネ」。

教え子たちが、教室で半分冗談をまじえながら、私の出発を激励してくれた。

現代の若者らしい明るいのはなむけの言葉であった。その中で一人の男子生徒がきわめて真じめに、「先生ほんとうに、アマゾンなどに行って大丈夫か」と心配してくれた。彼は普通の生徒以上に、南米やアフリカの自然に関心が深く、それだけに書物やテレビ映画なども、よくみている生徒だった。まじめに私のことを心配してくれる彼に感謝しつつ、今度の研修で得たものは、きっとそのまま生徒達に伝えるぞと心の中に決めて出発した。



しかし、ブラジルは私の想像しているよりなところではなかった。

「明日に開く大国」発展のめざましいこの国の姿をみて、私は見ると聞くの大違いを知った。彼の杞憂には応えられずとも、興味本位でブラジルを想像していた生徒達に、サンパウロ市内では、自動車が多く、その排気ガスで目が痛くなるのだと教えたなら、どんな質問が次にとび出すだろうか。

#### 10. 移住地における家庭教育の大切さ

アルゼンチンでお世話になった榎本氏宅を訪問して感じたことを書きたい。

榎本氏の長男一稔君は昨年、海外移住事業団の移住者子弟技術研修生として、和歌山県にやって来た青年である。私の学校にも来たが、帰国して、日本で学んだ花卉園芸の技術を生かし、父君と共に花造りに励んでいる。

御両親の話では、ちょうど高校を出て更に進学しようか、それとも家業に専念するか、の思案の最中、研修生の募集があり、これに応募したのだという。

日本から帰った彼は、ひかえめだった性格から積極的な性格になり、明朗・快活な青年になって、本気で花造りに取り組み出したという。日本に行ったことを、本人は勿論、それ以上に御両親が喜んでおられた。できるだけ多く、このような青年を日本に研修させるチャンスが与えられるよう、事業団をはじめ関係諸機関に要望したいこと

同時にわれわれも全面的な協力を約すべきだと思ふ。

この御家庭で知ったことだが、それは家庭教育の大切さだった。

南米諸国の中で、日本人移住者が比較的に少ない国はアルゼンチンであるが、この環境でも、彼等三姉妹が、正しいものを見かた、考え方をし、日本についての認識を精神面まで含んで正しくもっていることだった。姉さんは、女性ながら大学の工学部を卒業、日本の国鉄が援助協力を決定したアルゼンチンの鉄道会社に就職が決定したという。妹さんは薬学部にて在学中。この二人とも話したが、きわめて正確な日本語を話され、折目の正しい女性として好感がもてた。

その原因は、よく考えてみると、家庭教育にあった。お母さんは、日本で小学校の先生をされていた経験があり、その経験の上に立ってなお、幼い時から、現地での学校教育にプラスして、母親の全人格が子供にぶっつけられていたのだ。

学校教育もさることながら、移住地における他の二分野、家庭教育・社会教育の大切さ、特に私は家庭教育の子供に与える影響を実証された感じがした。

#### 11. 語学力は財産である

これほどこの言葉を痛切に感じたこともこれまでにはなかった。語学力の不足ゆえにカナダでも、南米でもすぐれた技術ももたながら、それを充分発揮できないでいる人が多いと聞く。もし私にも語学力がもう

少しあれば、どんなに研修の成果があがったか、惜しみてあまりがある。

商売でも、土地の売買でもそのゆえに失敗をし、交通事故の時にも大きな損をしたという例も聞いた。とび歩きの旅では、語

学力の豊かさがえるものを二倍にも三倍にもさせることは事実。

移住の条件に語学力を加える必要、そのための手だてが、一層のぞまれる。

## 視 察 を 終 っ て

8月24日午後7時過ホノルルからのJAL61便で東京着、羽田空港の大雑とら、大ぜいの人がいきれてムンムンする、うだるような暑さの中無事入国通関、事業団の方々に迎えられて宿舎祥平館についたのはもう10時近かったろうか。

小雨ふるむし暑い東京であったが何かホットして疲れが一辺にふき出した感じであった。視察中7人の団員でゆっくり、くつろぐ折もなかったのでせめて全員の無事を祈ってビールで「サルー」といきたかったがそれぞれの都合もあって果し得ずまた、他日を期したが少々残念でならなかった。何はともあれ風呂に入って畳の上でグッスリと眠ることにした。

翌25日かねてから分担してあった報告書の〆切期限等を確認、10月下旬に行われる第10回全国高校海外教育指導教師連絡会議に間に合わせるようとりきめた。

報告書の内容については各人の自由としたが、かねて事業団より詳しい資料による研究調査報告よりも昨年みたいにみたまま、きいたまま、はだで感じたものをそのまま報告する方が……との注意もあったし結局その両面からの調和をとることが最も大切なことと苦心を要したところである。

この報告は南北米における教育文化社会事情および日本人移住事情等の視察調査の目的で32日にわたる旅行であり、そのまとめであるが何しろカナダ、アメリカ、ブラジル、パラグアイ、アルゼンチンと多くの国、広大な地域にわたるため、そのほんの一部の視察であり、そのための全体観の間違いや誤解等があると思われるが叱正御理解を得たいと思う。

これらの地域についての勉強に或いは移住事業のため何かの参考になれば幸いと存じます。

終りにこの視察にあたって多大の御指導御協力御援助を頂いた事業団本部、現地支部、事業所等現地公館並びに県人会の関係者各位に対し心から感謝の意を表したい。

お蔭で全員無事視察を終了いたしました。ほんとうに有り難うございました。

昭和48年10月19日

全国海外教育推進高校代表  
海外研修視察教師団  
団 長 外 園 淳

## 参 考 资 料

海外研修派遣高校教師一覽表

		40年度	41年度	42年度	43年度	44年度	45年度	46年度	47年度	48年度	学 校 名 ・ 職 名 ・ 教 師 名
東 北	北 海						○				宮 野 市 立 宮 野 農 業 高 校 教 諭 道 下 岩 夫
	青 森				○						弘 前 市 立 弘 前 農 業 高 校 教 諭 三 浦 稔
	岩 手							○			県 立 江 刺 高 校 校 長 高 橋 利 明
	宮 城								○		宮 城 県 農 業 高 校 教 諭 石 川 隼 三
	秋 田					○					県 立 鷹 巣 農 林 高 校 教 諭 成 田 恒 治
	山 形	○									県 立 上 山 農 業 高 校 校 長 松 孝 一
	福 島			○							県 立 岩 瀬 農 業 高 校 校 長 村 田 春 男
	新 潟								○		県 立 加 茂 農 林 高 校 教 諭 皆 川 洋 作
	茨 城		○								県 立 笠 間 高 校 校 長 加 藤 省 三
	栃 木			○							県 教 育 委 員 会 指 導 課 農 業 教 育 係 長 杉 山 保
関 東	伊 豆										県 立 玉 余 高 校 教 諭 萩 原 行 雄
	甲 斐				○					○	県 立 解 谷 農 業 高 校 教 諭 田 辺 朝 松
	信 濃							○			県 立 安 房 農 業 高 校 教 諭 渡 辺 浩
	越 前						○				郡 立 瑞 穂 農 業 高 校 校 長 稲 垣 実 夫
	フ ー ク								○		県 立 平 塚 農 業 高 校 校 長 石 川 孝 雄
	山 梨					○					県 立 機 山 工 業 高 校 教 諭 中 島 真 人
	長 野									○	県 立 須 坂 園 芸 高 校 校 長 坂 本 勝 三
	静 岡							○			県 立 磐 田 農 業 高 校 教 諭 山 内 正 次
	山 西								○		県 立 上 市 高 校 教 諭 石 坂 久 忠
	石 川								○		県 立 柳 田 農 業 高 校 教 諭 従 二 喜 一
東 海	岐 阜		○								県 立 郡 上 高 校 教 諭 鈴 木 義 秋
	愛 知						○				県 立 安 城 農 林 高 校 教 諭 立 川 賢 一
	三 重				○						県 立 名 張 高 校 教 諭 松 本 野 一
	陸 奥										

陸	三	兀																	
近畿	福井	井																	
近畿	滋賀	賀																	
近畿	京都	都																	
近畿	大阪	阪																	
近畿	兵庫	庫																	
近畿	奈良	良																	
近畿	和歌山	山																	
近畿	鳥取	取																	
中国	島根	根																	
中国	岡山	山																	
中国	広島	島																	
中国	山口	口																	
中国	徳島	島																	
中国	香川	川																	
中国	愛媛	媛																	
中国	高知	知																	
九州	福岡	岡																	
九州	佐賀	賀																	
九州	長崎	崎																	
九州	熊本	本																	
九州	大分	分																	
九州	宮崎	崎																	
九州	鹿児島	島																	
九州	沖縄	池																	
九州	計																		
九州	計																		
九州	計																		

派遣 年度	県名	教師名	派遣時 年令	派遣後の略歴	派	
					一般教科における実践状況	
44	秋田県	成田節治	46才	派遣時と同じ 県立鷹巣農林高等学校	教材の中に計画的に熱帯農業、海外農業事情をとり入れ指導。また同職者への啓蒙に努める。	
	山梨県	中島真人	34才	S45.4山梨県高等学校職員労組書記長就任に伴い横山工業高校休職。 S47.4任期満了により横山工業高校教諭に復職。	年間指導計画の中に特に海外教育のための単元は設けていないが、教科の中で派遣先国の社会事情、日本人移住者の状況について説明。	
	京都府	斉藤進	41才	S46.3 辻井高校教諭 S46.4 京都府教育委員会指導主事となり海外教育関係業務を担当	桂高校在職中は生徒に深い感化を与え、卒業生に多くの海外移住者を輩出した。	
	徳島県	中島圭之助	54才	E46.4 県立城北高等学校校長となり、研究協議会会長を兼任。	余暇を活用し、講演映画会、弁論大会、展示会等を通じ、活動。また、各校担任教師の講習会も必要のつど開催。	
	鹿児島県	東園敏	46才	派遣時と同じ S47年県海外教育研究会副会長に任命された。	現在特別にカリキュラムを作成しての活動はないが、48年度以降について検討中。	
45	北海道	道下岩夫	40才	派遣時と同じ 道立富良野農業高校農業経営	海外視察で吸収した知識、経験及び実情等を紹介。また、授業の中に農家生活、農村生活等の話題をとり入れ、欠講の場合は、その時間を海外事情の講義に充当。	
	東京都	稲垣実夫	51才	S45.10 全国高等学校海外教育研究協議会会長に就任 S47.3 都立瑞穂農芸高校長から農産高校長に転任。	職務上、教科を通しての活動はないが、現地事情講演会を開催し、生徒の海外に対する関心度を深めている。	

の活動状況一覧表

昭和47年10月調べ

進後の海外教育活動		
クラブ活動指導上の実績	進路指導上の実績	海外教育研究協議会活動
海外事情、映写会、講演会、展示会等を計画的に実施。クラブ員の各種研修、講習会への積極的参加。	海外農業実習生、研修生制度により数名を海外へ派遣し、海外移住の醸成に当る。	会の発展充実に努力
海外研究クラブの顧問として生徒の指導。	移住を希望する生徒の相談に応じている。	S 45.4 山梨県高校海外教育研究協議会理事長に就任。以来事務局校として会の中心となり活動。
研究協議会加盟校に請われて、講演をする等、他校のクラブ活動においても多くの効果をあげてきた。	ブラジル国移住者7名、カナダ国移住者2名、研修所修了者1名。	新事務局長の良き指導助言者として活躍。
県内全高校にクラブをつくる方針で努力。移住者も高校在学中に相談し、卒業後移住する者が出てきた。また、中には中退して移住する者があった。	高校海外教育の育成強化につとめた結果、移住相談者も増加し、送出数も底入れをした。相談件数のうち、高校生、あるいは卒業生が大きなウエイトを占めている。	県下38校全て協議会に加盟し、各校がそれぞれの分野で自主的に活動。
クラブを特別教育活動のなかに位置づけして毎週木曜日第7校時を時間割に編成して実施。	本人の適性を考慮し、個人指導をやっているが、現在移住者は出していない。然しながら、派米研修生2名を送り出している。	
現在クラブが結成されていない。S 48年度から新教育課程が施行されるため、その際にクラブを設立するより準備を進めている。	北米、南米各国の日系人の活躍状況および国際社会人として活躍することの意義について説明。	特になし。
前任校においてクラブを結成し、活動の基盤をつかった。また農産高校においては、クラブ活動の強化を図っている。	瑞穂農芸高 1名 卒業と同時に 農産高校 3名 移住	技術移住との関連から新たに都立工業高校27校の加入促進を図っている。



派遣 年度	県名	教師名	派遣時 年齢	派遣後の略歴	派 遣	
					一般教科における実践状況	
45	愛知県	立川賢一	37才	派遣時と同じ 県立安城農林高校教諭	特になし	
	山口県	藤本俊輔	56才	S46.3 退職 S46.4 県立都濃高校講師 として就職。 S47.4 県立徳山高校講師 S47.6 研究協議会事務局 担当 辞任。	海外に対する関心度を高める べく努力。	
	沖縄県	我部政照	34才	S46年度前期 大阪府立園芸高校勤務 半年間海外事情相談役と して務める。後沖縄県高 等学校海外教育研究協議 会理事就任。 (南部農林高校在籍)	現在、外国語(ポルトガル語) を担当し、視察研修の体験を とり入れ指導。	
46	岩手県	高橋利明	49才	派遣時と同じ 県立江刺高校校長 S47.5 岩手県高等学校海 外教育研究協議会長に就任	各教諭に日常教科の中に意識 的に海外教育を関連づけるよ う指示。また各校農場主任会 議等において再三海外教育を 強調。	
	千葉県	渡辺 浩	42才	派遣時と同じ 県立安房農業高校	海外事情についての紹介と海 外教育の普及助成を図ってい る。	
	静岡県	山内正次	51才	派遣時 県立磐田農業高校 S47.4 県立浜松東高校に 転任	派遣前から海外教育について は熱心であったが、現在は、 スライドを使用して現地事情 の講義に当たっている。	
	富山県	石坂久忠	50才	派遣時と同じ 県立上市高校	担当教科内外を問わず、教科 内容を実践的に開発。	

後 の 海 外 教 育 活 動		
クラブ活動指導上の実績	進路指導上の実績	海外教育研究協議会活動
映画、座談会等において活躍。 図書室に海外コーナーを設置。	派米研修生、カナダ農業訓練生事業を積極的に推進し、毎年5～8名程度の応募者を出している。	研究協議会は未結成。 今年中を目標に結成準備中。
行事等、臨機の活動指導に限られ、常時継続的活動の指導を行なうまでに至っていない。	数人の生徒の移住希望があったが、いづれも実現しなかった。	84.7.6 月迄事務局を担当。 会の運営のやりくりに努力し、会を維持推進してきた。
海外移住研究班の顧問。 夏期休暇中、全班高校生を対象にした海外教育研修会にクラブ生徒と共に参加。	進路指導部長を勤め、移住希望生徒に対し、積極的なアプローチを図っている。	84.6年度、理事に就任。 84.7.7 総会にて視察研修報告及び、第3号会誌に発表。
生徒に対する全体指導助言をし、担当教師を奮励している。	特になし	84.8年度県高校教育研究会の中に海外教育部会を設け、文部省指定団体にする。 会員校増加を図り、校長会等の会合の都度提案説明。また、各校を歴訪説得して海外教育活動の名分と基盤作りに努力。
1週1時間のロング・タイムの中で海外教育を推進し、また農業文化祭にて海外事情紹介展を実施。その他、講演会、映画会の実施。	同校卒業生の移住者 約10名 青年協力隊 7名 青年の船 3名 青少年指導員海外派遣制度 2名 カナダ酪農実習生 7名	県高校海外教育研究会、役員会、総会、出席。 他、海外教育高校生夏期研修会等に参加。
現在クラブは未結成であるが、可急的早期にクラブ結成が期されている。	旧任校に於ては、移住者子弟及び海外農業実習生を多数送り出した。	新任校は新設校で加盟校でなかったが、着任後直ちに加入し、研修会に於て、カナダ、南米事情を講義。
校内外のクラブ活動の実施。	卒業見込者に対し、海外協力事業の啓発に努める。 また卒業生の有志を募り、伯国移住計画の基幹をなし、拡大につとめる。	県内高校海外教育指導者として教育活動を推進。

派遣 年度	県名	教師名	派遣時 年齢	派遣後の略歴	派 遣	
					一般教科における実践状況	
46	奈良県	森 敦 貞	37才	派遣時と同じ 県立郡山農業高校教諭	専門教科(社会科)の中に常に海外事情をとり入れ実績をあげている。	
	香川県	矢野 豊 敏	50才	派遣時 県立石田高等学校校長 S47.4 県教育委員会保健体育課長に転任	校長講話等機会のあるたびに海外発展の必要性、海外事情の講話をし、転任後も講演会等に積極的に協力。	
	長崎県	真 崎 昭 夫	43才	派遣時と同じ 県立諫早農業高校	日本と視察国の農政、農業についての相違について、あるいは現地農業事情について指導。	

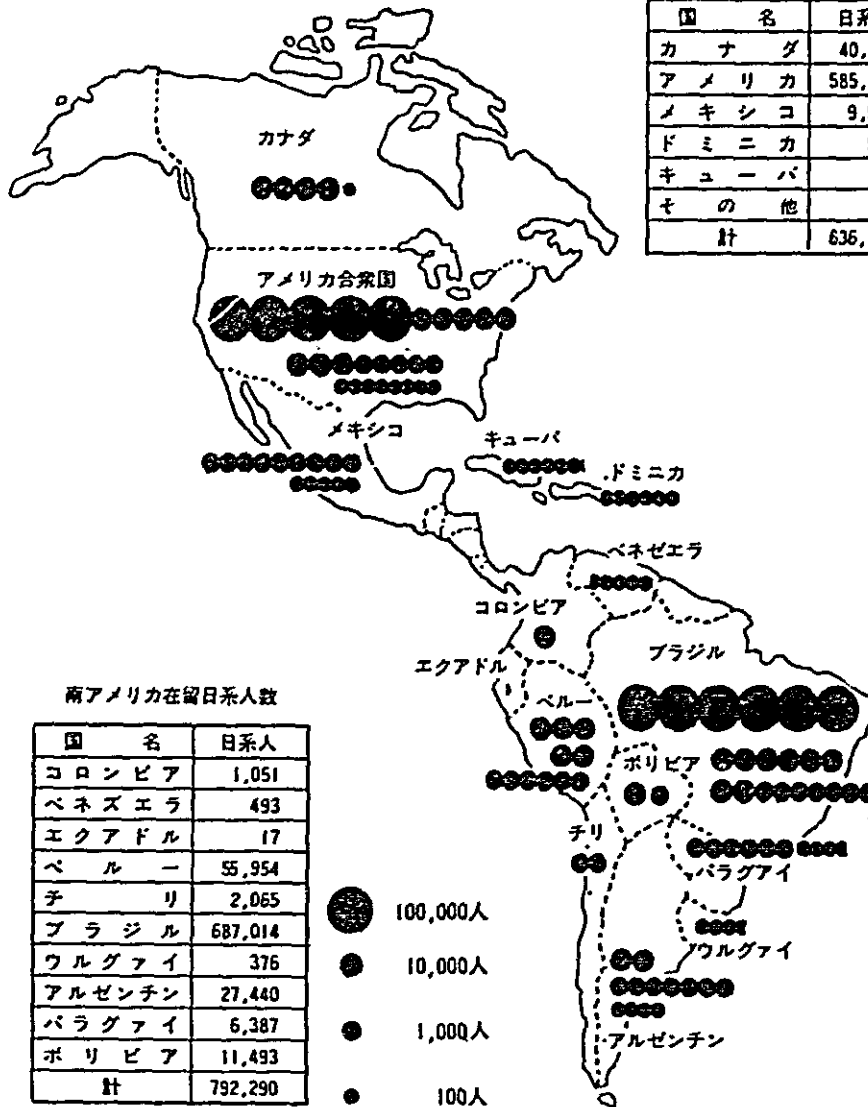
後の海外教育活動		
クラブ活動指導上の実績	進路指導上の実績	海外教育研究協議会活動
スライド映写等を実施し、クラブの育成強化を図る。	海外派遣実習、研修制度ともに、移住についても希望者の良き相談者として進路指導に当る。	県主管部長招集の、あるいは県事務所、県海外協会等関係団体が主催、共催の会議に機会をとらえ、卒業推進等の打合せを実施。
前任校に於て、月1回程度、直接クラブ員に接し、指導に当った。	クラブ活動を通じて、海外進出の気運醸成に努めたが、在學生の中からは移住者は出なかった。しかし、派米実習生1名、派米研修生3名を派遣。	県事務所その他関係機関と共催で講演、映画会等を開催し、特に高校生の海外知識の高揚、移住に対する認識、理解を深めた。
海外移住クラブ顧問として週2回当団配布資料により、南米事情等の指導を行なっている。	S 46 カナダ訓練生希望者2名の推せん。 * 南伯雇用農青年1名送出。	S 44 年度迄研究協議会事務局担当者として活躍 また、現在は研究会活動に率先して参加。

# 南・北アメリカ大陸に活躍する日系人数

昭和47年10月現在

北・中アメリカ在留日系人数

国名	日系人
カナダ	40,123
アメリカ	585,828
メキシコ	9,566
ドミニカ	598
キューバ	624
その他	29
計	636,768



南アメリカ在留日系人数

国名	日系人
コロンビア	1,051
ベネズエラ	493
エクアドル	17
ペルー	55,954
チリ	2,065
ブラジル	687,014
ウルグアイ	376
アルゼンチン	27,440
パラグアイ	6,387
ボリビア	11,493
計	792,290

参 考 資 料 その4

日本人が移住しているおもな国

〔わが国との関係〕

- ブラジル…日本とブラジルとの国交は1895年(明治28年)の日本、ブラジル修好通商航海条約の調印によってはじまり、1908年(明治41)6月18日笠戸丸でサントス港に上陸した158戸781名の第一回移住が開始された。1963年(昭和38年)10月に日本、ブラジル移住協定が発効し、日本人の技術および労働力を活用してブラジルの経済開発に役立て、日本とブラジルの友好関係を強くすることを基本としてすすめられている。
- アルゼンチン…日本との国交は、1898年(明治31年)調印された修交通商条約にはじまり、日露戦争のときわが国に日進、春日の2軍艦を譲ったこともあり、友好的である。1961年12月には、当時のフロンテイシ大統領が国賓として来日し、友好通商航海条約や移住協定に調印している。また、1967年5月には皇太子および同妃殿下が同国を訪問され、わが国との友好関係はますます深められた。
- パラグアイ…日本との関係で、もっとも重要なものは移住で、現在日系人は約7000人(うち日本国籍者6800人)である。パラグアイへの日本人集団移住は、1934年ブラジルで外国人移住制限法が制定されたことがきっかけとなった。当時日本人の入国に開放的な態度をとっていたパラグアイ政府の許可を得て、1936年(昭和11年)アスンシオン市の東南132Kmのホルメナ移住地に入植したのがはじまりである。1959年10月日本から380万ドルの船舶借款がなされ、日本製の河船がパラグアイ国営商船隊の手によって運航されている。
- ボリビア…1907年(明治40年)に正式に外交関係が開かれてから、ボリビアは在日外交機関をおいていたが、わが国がラパスに公館を開設したのは1952年、すなわち、ボリビアが対日平和条約に調印してからである。1956年(昭和31年)8月2日、わが国とボリビアとの間に移住協定が締結され、5年間に1000家族または6000人の入国が認められ、さらにそれが延長されて現在にいたっている。
- カナダ…日加関係は移住と経済関係がおもなものである。両国の関係は、19世紀末、日本人のカナダ移住開始と、バンクーバーに日本総領事館が設置(1889年)されたことによって始まった。貿易関係は1954年の日

加通商協定発効以来盛んになり、カナダにとっては輸入とも、米国、英国について日本が第3位の取引相手であり、日本にとってもカナダは第3位の輸入国となっている。日加両国はこうした緊密なつながりをさらに充実させるために1963年以来日加関係会議をはじめ民間においても協議の場をもっており、大平洋をはさむパートナーとして日加両国の関係はますます緊密化している。

- アメリカ…ペリーの率いる“黒船”の来航（1853年）は、わが国が米国と接触した最初の機会であり、また日本が近代国家として脱皮する直接の契機となった重要な意義をもっている。1860年にはじめて幕府の遣米使節が渡り、明治元年には第1回ハワイ移住者が渡航し長い歴史の中で農業、漁業面で大きな実績を示している。1965年には人道上の見地から移民國籍法が大幅に改正され日本人を含むアジア人に対しても大きく門戸が広げられ、1963年7月1日から全面的に発効した。既移住者は日系市民として政界、司法界、労界をはじめ知識階級にも多く進出し、各方面で活躍している。

参考資料 その5.

海外移住事業団国内機関一覧表

機 関	〒	所 在 地	電 話	
本 部 ( 附属機関 )	160	東京都新宿区本塩町 8 の 2 ( 住友生命四ツ谷ビル )	03	359-8281
海外移住センター	235	神奈川県横浜市磯子区西町 16-5	045	751-1121~6
海外移住研修所	371 -02	群馬県勢多郡宮城村大字柏倉溝ノ口 4114	0272	83-3225
( 国内支部 )				
北海道支部	060	札幌市中央区北 1 条 5 の 3 ( 北 1 条ビル )	011	261-0675 0648
仙台支部	980	仙台市上杉 1 の 4 の 2B ( 県上杉分庁舎内 )	0222	63-0795
東京支部	160	東京都新宿区本塩町 8 の 2 ( 住友生命四ツ谷ビル )	03	359-7774
横浜支部	220	横浜市白区岡野町 2 の 12 の 20 ( 横浜渉外労務管理事務所内 )	045	312-4961
名古屋支部	460	名古屋市中区丸の内 3 の 4 の 13 ( 名古屋労政事務所庁舎内 )	052	971-9974
大阪支部	540	大阪市東区京橋前之町 2 の 2 ( 佐伯ビル )	06	941-7525
神戸支部	651	神戸市葺合区御幸通 8 の 9 の 1 ( 神戸国際会館内 )	078	221-6520
広島支部	730	広島市基町 10 の 3 ( 県自治会館内 )	0822	21-7411
高松支部	760	高松市番町 5 の 1 の 24 ( 観光ビル内 )	0878	31-1111 内線 352
福岡支部	812	福岡市博多区博多駅前 2 の 9 の 28 ( 福岡商工会議所ビル内 )	092	41-1846
熊本支部	860	熊本市上通町 2 の 21	0963	53-4227
沖縄支部	900	那覇市西 3 の 10 の 17	0988	68-4046 4415

( 注 ) 大阪支部は 11 月 4 日に下記へ移転の予定

〒 530 大阪市北区堂島上 2 の 38 の 10 ( 京富ビル ) 電話未定



JUL  
70  
23  
E  
LIBF